令和四年度京都大学書道部第百三十回書展

冬、禅

■場所

建仁寺　西来院・禅居庵

■日時

十二月十七日（土）、十八日（日）

十時～十七時

（十八日は受付十六時まで）

■入場無料

巻頭に寄せて

京都大学書道部　部長　須田光太郎

書とはなにか、道とはなにか、それがわからないと、書道部で筆を持ってはいけないような気がする。周りがわかっていて、自分だけが知らないような気がするから、知らなければいけないような気にすらなってくる。

かと言って、中国の文化も日本の文化もさほど知っているわけではないし、さほど重くない筆をもつために、わざわざ重い本を図書館から運ぶのもしんどい。なので、まずは自分でこしらえた理屈で、筆をもつ言い訳を考えようとする。

書とは何か。自分は小学生から筆の稽古をしているのだから、その答えは自ずとわかるはずだ。それはおそらく明快で、筆を持って字を書くことだ。ただ、鉛筆で書いてもペンで書いても、それは「書」であるかもしれない。あるいは、篆刻だって「書」とされる。であれば、書とはもっと包括的で、果てしないものかもしれない。でもきっと、何か共通項がある。それは例えば、何か「跡」を残すものを指すということなのかもしれない。今はただ、自分ならではの字の「跡」を残せれば、それを書としてもいいのかなと思う。

また、道とは何か考える。心のことだろうか。書を見ればその人の心や人と為りが分かるという話がある。ただそれは、もっと書が日常的に学ばれている時代の話だったと思う。今日の人々の意識では書の道は完全に芸術の範疇にあり、日用の書は読めるかどうかがものを言う。そこにかつてのような、「どういう人に師事して」「どのような姿勢で」書を「学んだ」かが、書に表れる人格を左右するということはあまりない。では、そのような時代に、あえて進んで書を学ぶ自分の在り方に、何か客観的な意味はあるのか、いや、おそらくない。むしろ自分がいつの間にか執着してきた「書」という行為に半ば身を委ね、自分が自然と流れ着く方向に学び続けるのがいいような気がする。かえって、無理に自分の書に意味を見出したくはない。

未だ曖昧ではあるが、これだけ考えれば、筆を持つ覚悟くらいはできる。筆を振り回し、周りの人の考えを聞きながら書を築くうちに、新しい気づきがあり、また自分の考えは自由に走り回っていくはずだ。

書とはなにか、道とはなにか、正しい理屈がわからなくても、自由に「書道」をし、「書道」を自分なりにわかることを自然と許してくれる。だから、自分はこの場がものすごく好きなのかもしれない。

改めまして、第一三〇回京大書道部書展「冬樟展」にお越しいただき、誠にありがとうございます。京都大学書道部の先輩方から我々が受け取ってきたこの場の雰囲気を、少しでも感じ取っていただき、ごゆるりとご高覧・ご批評賜れれば、光栄の限りです。

また、末筆で失礼いたしますが、開催に伴って平時からお世話になっております顧問の成田健太郎先生、行友三輪子先生、そして技術顧問として今夏よりご指導をしていただいております大原蒼龍先生に感謝を申し上げます。また、この自由な場を、さまざまな困難の中でなお守り続けてきた先生方、先輩の方々に、深く敬意を表し、挨拶とさせていただきます。

令和四年一二月吉日

書を自分で表装する、悲喜こもごも

行友　三輪子（書道部OG・京都大学附属図書館図書館企画掛主任）

表装とは、作品を台紙（表装用紙）に貼り付けて掛軸や巻物に仕立てることです。表装用紙の色柄や、軸装か額装かでも、作品の印象がガラッと変わります。

今では表装を安価に外注できるようになりましたが、二十年前の書道部では、部員自身で表装を行っていました。参考までに、軸装の手順をご紹介します。

①作品に霧吹きで水をかけ、皺を伸ばす

作品を一週間以上乾かした後でないと墨が滲むため、作品の完成締切を破るとここで痛い目を見ます。

②裏打ち紙（白い厚紙）の全面に糊を塗る

糊を水で溶いて濃度を調整しますが、糊が薄いと作品が剥がれ、濃いと固まった時に巻きづらくなります。

③作品を裏打ち紙に貼り付ける

作品の端から少しずつ裏打ち紙に置き、刷毛でこすって定着させます。必ず皺が入るので、新入部員が最も緊張する作業です。

④裏打ち紙の四方をベニヤ板に固定して、自然乾燥させる

乾く過程で紙が縮んで反るのを防ぎます。ベニヤ板の水拭きが不十分だと、作品に茶色く色が移ります。

⑤作品部分を切り取り、上下に「一文字（いちもんじ）」（細長い装飾紙）を貼る

⑥作品の上下左右に表装用紙を貼る

一文字と表装用紙の組合せこそ表装の醍醐味で、部員のセンスが発揮されます。

⑦表装用紙の上下に木の軸棒を貼る

⑧上の軸棒に金具を差し、紐を結び付けたら完成です！

慣れない工具を使用しつつ、軸と紐を取り付けたら完成です！

これらの作業を、二～三人が一チームとなって行いました。先輩の作品を後輩が表装した結果、作品がベニヤ板色に染まって書き直し…という悲劇も。書も表装も、一発勝負なのです。

仕上がりの素人感は拭えませんが、色とりどりの表装が作品の個性を際立たせ、会場全体が賑やかでした。私の場合、空色の表装用紙に桜模様の一文字を合わせた作を今でも気に入っています。

「執筆法」

「執筆法」とは、筆の持ち方法論の事を言う。執筆法に於いて、「こうでなければならぬ」という決まった持ち方があるわけでは無い。良い「書」を書けるのであれば、どのような持ち方であっても良いと言える。然し乍ら、執筆法は古来多くの書論の中で冒頭に取り上げられており、「書」というものを考える上で重要な事項と言える。

大原蒼龍（技術顧問、日展会友　書家）

「執筆」
一
執筆欲死。運筆欲活。揖欲死。腕欲活。
（執筆の指を転動せしめず、運筆の腕を活躍せしめよ。）
二
五指相次。如螺之旋。緊捻密持。不通一縫。則五指死西臂斯活。管欲砕而筆乃頸矣。
（五指が順序よく次（なら）ぶこと螺旋のごとくする。ひきしめ捻じり、指間を詰め、一糸も通さぬようにする。）

『論書賸語』王虚舟

「撥鐙法解」
書有撥鐙〔注一〕法。鐙古燈字。撥鐙者。聚大指食指〔注二〕中指撮管杪。若執管杪。若執鐙挑。而撥鐙即雙鉤法也。
（書の執筆法には撥鐙法というものがある。鐙は古くは燈の字に作る。撥鐙とは大指、食指、中指をあつめて筆管の上部を撮むことであり、油燈を執って挑げるような状態を言う。撥鐙法とはつまり、雙鉤法の事を言うのだ。）

『書学捷要』朱閑雲

〔注一〕…「鐙」は本来燈台の事、後に油燈（ともしび）の意になる。また、馬鐙（馬具のアブミ）に解する説もある。
〔注二〕…「大指」は親指、「食指」は人差し指をいう。

この他にも沢山の執筆論があり、古人が如何に心砕き、気を配っていたかが伺える。近年の大陸では、「五指執筆法」又「五字執筆法」と呼ばれるものが主流となっている。私も此の執筆法と撥鐙法を基軸に日々考究している。軸となる執筆法を一にして、書風や求める線に応じた理に適う法を追求していくのが良いと考える。中野越南・小坂奇石・古谷蒼韻などは執筆法を常に熟考・研究し、其の法は精妙を極めており執筆の姿そのものに美があった。

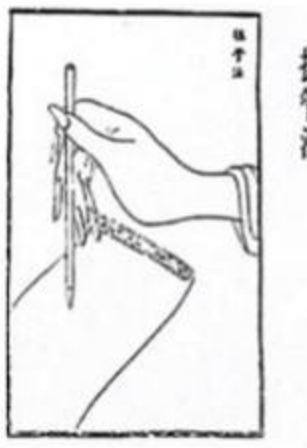
「書」を学ぶ者として執筆法は最初にぶつかり終生付き纏う問題点である。より深く執筆法について考察し実践される事を望む。

「執筆図」

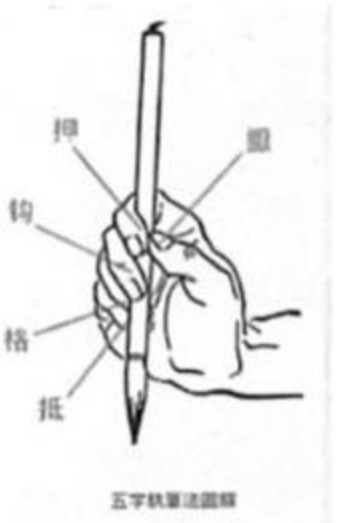
撥鐙法



握管法



『漢谿書法通解校證』戈守智



作品制作の方法―臨書と創作―

臨書

歴史上の優れた書の古典を手本として、それを真似て書くことを臨書と言います。書道の学習で最も基本となる方法で、伝統的には次の三つの段階を踏むのが良いとされます。

(1) **形臨**　文字の形や筆遣いを似せて書くことです。古典をよく観察し、できるだけ古典に近づけて書くことが学習の出発点となります。

(2) **意臨**　形に拘らず、古典の雰囲気や精神を汲み取って書くことです。意臨が重視されるのは、形だけを追っていると時に筆運びのリズムが失われ、浅い印象の書になってしまうことがあるからです。また、古典の中には模本（敷き写し）や拓本（石に刻し、それを墨で写しとったもの）だけが残り、元の姿が伝わっていないものもあります。そのようなものを臨書する際には、想像力を働かせて書くことが必要です。

(3) **背臨**　古典を見ずに、記憶を頼りに再現して書くことです。古典をいかに観察し、理解しているかが問われます。

形臨、意臨、背臨と進むにつれて、臨書には書き手の個性が強く現れるようになります。臨書は単なる模倣ではなく、一つの表現方法なのです。臨書作品は、そのような学習の成果を作品として形にし、発表するものです。

臨書の対象となる古典が載る冊子を法帖と言います。初めから芸術作品として制作されたものもあれば、石碑や手紙、文章の下書きなど、実用的な目的で書かれたものもあります。

京大書道部の書展では、臨書作品の場合キャプションに臨書した法帖を掲示しています。ぜひ作品と見比べてご覧ください。

創作

臨書に対して、自分が表現したい言葉を書くことを創作と言います。

自分で考えた言葉を書くこともあれば、漢詩や漢文、和歌や俳句、詩や短歌、歌詞などに題材を求めることもあります。

作品の構成や書体、書風は、選んだ言葉を最もよく表現できるように考えて工夫します。臨書の学習を活かし、古典の表現方法を取り入れると、作品に深みと味わいを出すことができます。

闇雲に言葉を書くのではなく、自ら感動や想いを言葉に託し、それに合った表現を探して書くのが創作作品です。

作品の構成―印と落款―

落款

作品の末尾に書く署名とそれに続けて押す印を落款・落款印と言います。名前のほか、語句の出典や臨書した古典の名、製作した場所や時間を書くこともあります。

印の種類

落款印以外にも、作品の右上（冒頭部分）に押す引首印や、自由な位置に押す遊印が加えられることがあります。

書の分野と有名古典について

漢字には楷・行・草・隷・篆の五つの書体があります。数千年前に、身の回りの事物を書き記さんとする行為によって象形的な篆書が生まれ、文字としての美しさや抽象性、実用性を求める中で隷書が発展しました。現代でもよく使われている楷書・行書・草書はこの篆書と隷書を基盤として作られた書体です。一方で、仮名・調和体は、日本が中国から漢字を輸入し独自に書法を発展させてきた結果生まれた書の分野と言えます。

一口に〇書と言っても、書く者の呼吸や心の動き、如何なる結体を良しとするかという考え方や経験などによって、その書が持つ趣は変化します。そこに書の面白さや芸術性が在るのではないでしょうか。ぜひ以下の有名な古典や色々な作品などを見比べて、その面白さを体験してみてください。

「楷書」は永字八法と呼ばれる、点・画・転折・払いに関する一定の規則によって書かれる書体です。その書法は唐代に完成され、堂々たる威厳と流麗な美しさを併せ持つ素晴らしい古典が多く残されています。

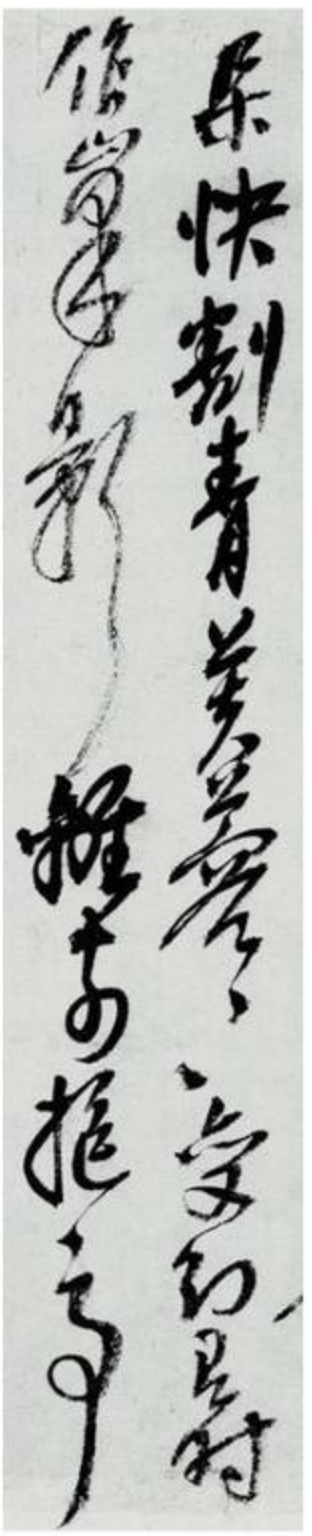


画像：九成宮禮泉銘（欧陽詢）

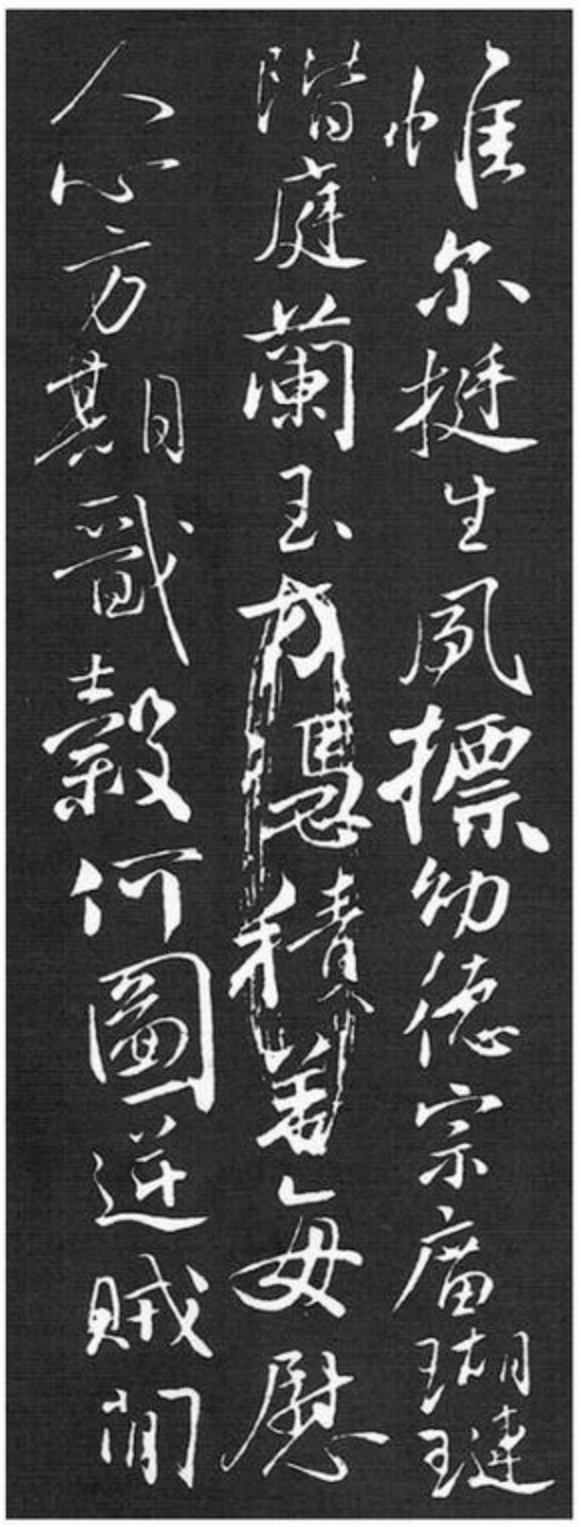
「行書」は一般的に隷書の速書き体として生まれたと言われており、点画を繋げたり省略したりして書かれる書体です。崩し方はさまざまで、曲線を軸とした流線的な書風もあれば、直線を軸とした力強い書風もあります。



画像：蘭亭序（王羲之）



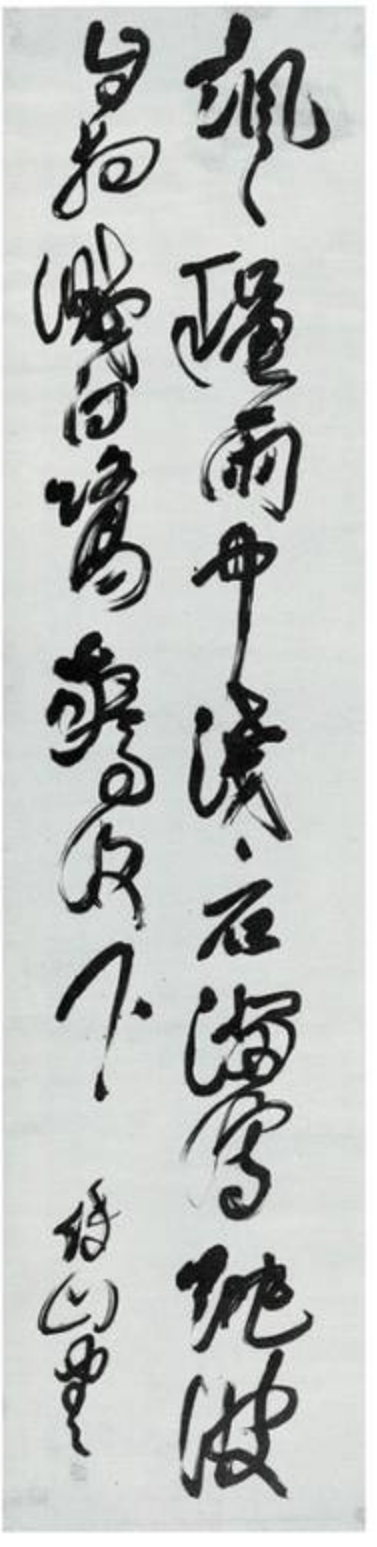
画像：詩稿（呉昌碩）



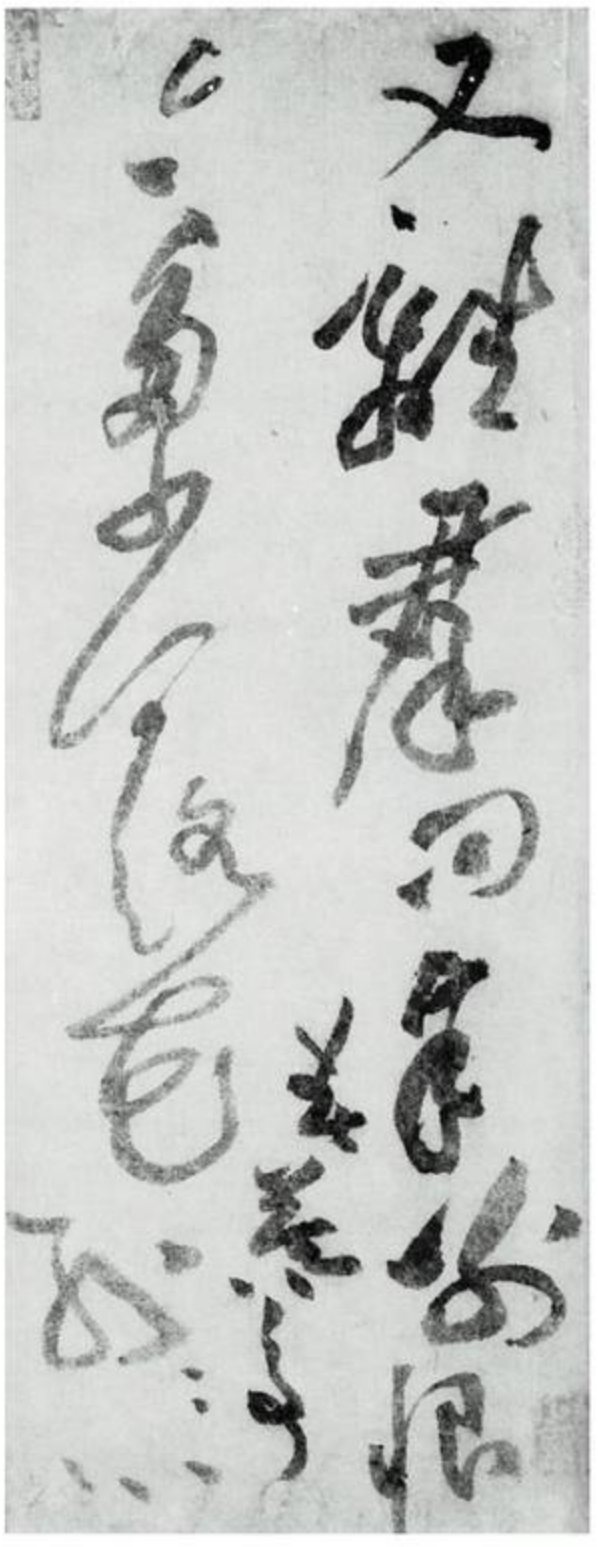
画像：祭姪文稿（顔真卿）



画像：十七帖（王羲之）

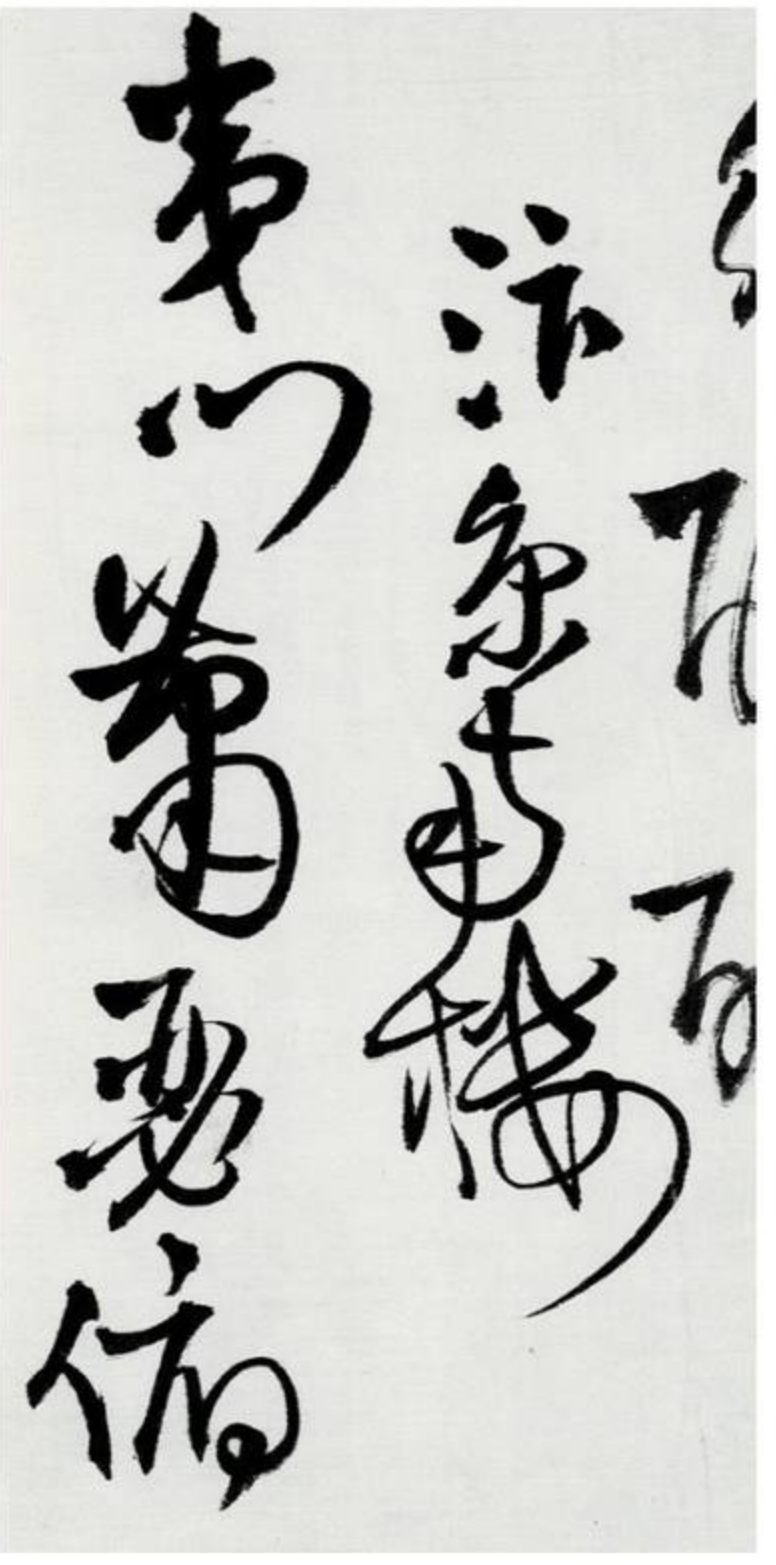


画像：五言絶句四屏（傅山）



画像：李太白憶旧遊詩巻（黄庭堅）

「草書」もまた隷書の速書き体として、漢代に起こった書体です。唐代までに一定の崩し方が確立された後、宋から明・清にかけて、その自由度の高さに表現性を見出した能書家らによって芸術性が高められました。



画像：草書七律五首巻（王鐸）

「隷書」は篆書から発展し、五体の中で唯一「波磔」と呼ばれる払いのような横画を持つ書体です。文字として整えられつつも篆書の象形的な字形が残っており、筆法もまだ習熟していない段階ともいえますが、かえってそこに造形美と素朴な古籀の風味を併せ持った魅力を見出すことができます。



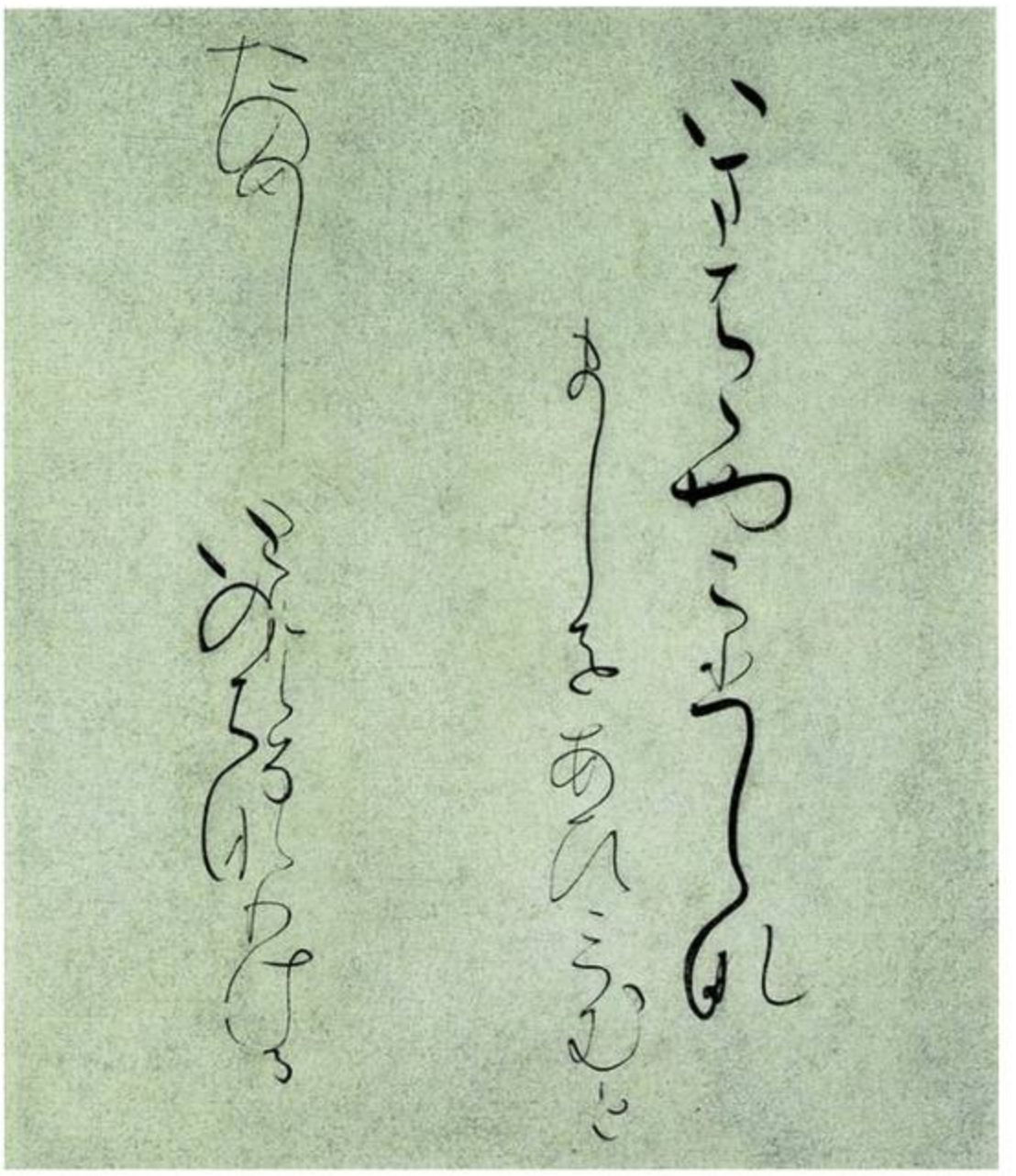
画像：曹全碑（筆者不明）

篆書はその絵的な造形に特徴がある最古の書体です。世界に存在する事物と文字とを初めて繋げた記号であり、その字形から想起されるイメージによって、豊かな表現性を持っています。漢字の意味を知らない人にも魅力が伝わる作品を書くことができます。

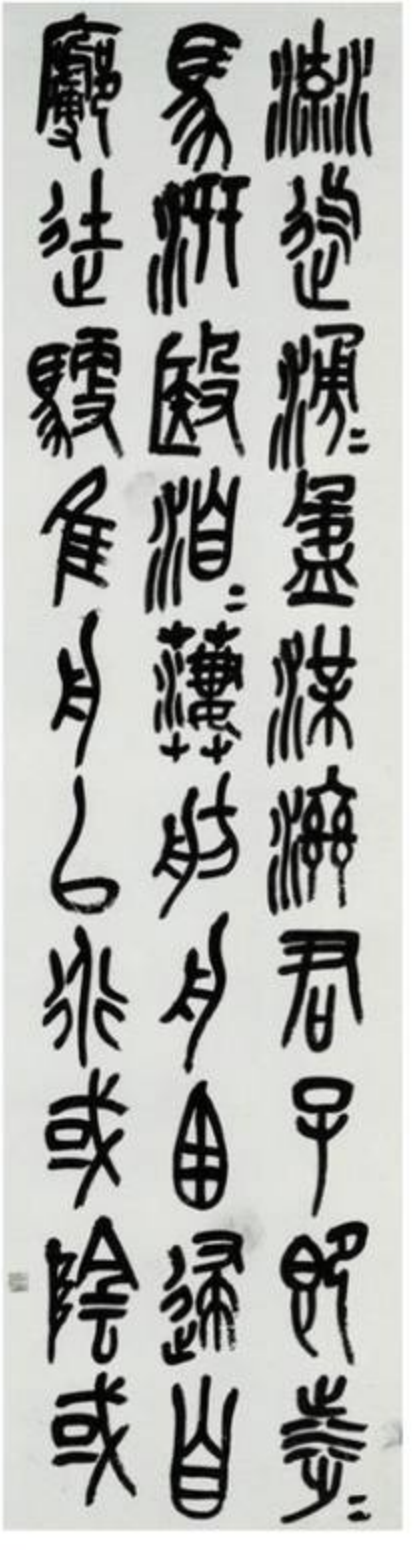


画像：石鼓文（筆者不明）

仮名は日本語の音を割り当てた漢字の一部を変化させて作られた、日本固有の書法です。柔らかく流れのある運筆が特徴的で全体に寛雅な雰囲気を持っています。散らし書きという独自の構成法も漢字書には無い魅力の一つです。



画像：升色紙（伝藤原行成）



画像：臨石鼓文（呉昌碩）



画像：自書七言絶句十二屏（傅山）

調和体あるいは**近代詩文書**は戦後に一般的な可読性を重視する動きによって起った書法です。文学作品や詩・短歌・俳句、歌詞やセリフといった題材を用いるので、文意を加味した文学性のある、また書道をしていない人にも親しみやすい作品を作ることができます。（著作権が気になるので画像はありません）

作品一覧

技術顧問
大原蒼龍

一回生
大原佳奈
植村亮
齋藤亜紀
永田はるな
中野葵
松岡加純
松阪明日香
宮原康輔
結依

二回生
大林明日香
木下美優
木村隼翔
城本昌明
須田光太郎
二宮海椰

三回生
倉橋あい
凌楡凱
髙石京花
戸髙海
乘杉玲壽

四回生
乾未樹
釜田弘一朗
栗原瑞樹
近藤毅
鈴木翔子
関美乃
豊留まり
松岡柚花
松尾有輝也
安田直記
吉田凌祐

修士一回生
渡部裕貴

修士二回生
市川拓真
鵜川大輝
中林亮

博士一回生
中村勇真

創作・『雙鸞遊蘭渚』……10
創作・『雁卵生（かりこむ）　瑞祥の歌』……10
臨書・伝紀貫之『高野切第一種』……17
創作・『下学而上達』……17
臨書・傅山『草書五言絶句四首四屏』……25
臨書・王鐸『張芝帖』……19
臨書・褚遂良『雁塔聖教序』……20
創作・『暢適』……27
臨書・黄庭堅『松風閣詩巻』……14
臨書・『石鼓文』……22
創作・『王維詩　竹里館』……15
臨書・顔真卿『顔勤礼碑』……22
臨書・王義之『東比帖』……22
臨書・張継『楓橋夜泊』……28
創作・『秋風』……17
臨書・王鐸『將入脽城留別之作』……11
臨書・『始平公造像記』……18
臨書・『礼器碑』……18
創作・『上田敏訳詩「珊瑚礁」』……25
臨書・黄道周『石城寺諸友過集』……13
臨書・張瑞図『感遼事作六首巻』……21
創作・『福寿』……18
創作・『坐夯失戀嗰花壇裡（失恋の公園に座って）』……18
臨書・智永『真草千字文』……10
創作・『蘇軾詩』……10
創作・『書者心画也』……17
創作・『倣傅山狂草軸』……17
創作・『虎卯図』……25
創作・『OOPARTS』……17
臨書・王義之『蘭亭序』……24
臨書・伝橘逸勢『伊都内親王願文』……24
臨書・『乙瑛碑』……17
臨書・金農『金冬心隷書冊』……25
創作・『龍門の滝』……19
創作・『見明かす』……12
臨書・米芾『李太師帖』……19
臨書・王献之『中秋帖』……19
臨書・陶淵明『酬劉柴桑』……14
臨書・『源氏物語絵巻』……19
臨書・西行『山家心中集』……19
臨書・趙孟頫『六体千字文』……29
創作・『早発白帝城』……16
創作・『春和景明』……17
創作・『留別故人』……11
創作・『朱熹「偶成」』……20
創作・『玉雪開花』……27
創作・『木鶏』……28
創作・『陸游詩一節』……21
創作・『蕭散風神真隠人』……29
創作・『伏見はくれたけ』……24
臨書・王義之『蘭亭序』……16
創作・『欧楷―蘭亭序―』……29

合作

戸髙海（三回生）・乗杉玲壽（三回生）・石田あかり（三回生）・倉橋あい（三回生）
　創作・『寒いですね』……30
乗杉玲壽（三回生）・戸髙海（三回生）・須田光太郎（二回生）・植村亮（一回生）
　創作・『山月記』……30
乗杉玲壽（三回生）・戸髙海（三回生）
　創作・『古詩十九首より』……16
中村勇真（博士一回生）・石本森羅（六回生）・秋友祥香（修士一回生）・乾未樹（四回生）・戸髙海（三回生）・須田光太郎（二回生）
　創作・『歴代部長合作　～十二支～』……24
市川拓真（修士二回生）・鵜川大輝（修士二回生）
　創作・『100万年の幸せ!!』……31
凌楡凱（三回生）・須田光太郎（二回生）
　創作・『「懐才不遇詩」吟書並評釋』……31
木村隼翔（二回生）・須田光太郎（二回生）
　創作・『年末に』……23
中村勇真（博士一回生）・市川拓真（修士二回生）・鵜川大輝（修士二回生）・中林亮（修士二回生）・安田直記（修士二回生）・吉田凌祐（修士二回生）・岩田恵理子（修士一回生）・柴田達也（修士一回生）・服部佳乃子（修士一回生）・渡部裕貴（修士一回生）・石本森羅（六回生）
　臨書・辻本史邑『破体五律』……23
四回生合作
　創作・『卒業証書』……23
一回生合作
　創作・『白居易詩』……23
全体合作
　臨書・『えんぴつ臨書』……31

作品紹介

賛助作品

技術顧問　大原蒼龍

○西来院作品



『雙鸞遊蘭渚』

どのような精神の流露で書くのか。自然な流露が書の要諦の一つと考える。

○禅居庵作品

『雁卵生（かりこむ）　瑞祥の歌』

「なが御子や　ついに知らむと　雁は卵生（こむ）らし」

漢字（男手）から女手に移り行く過程に思いを馳せた作。王羲之の草書を展開させていく妙味と可能性を考えていきたい。



○西来院

1

鵜川大輝（修士二回生）
創作　行書　『留別故人』　二八

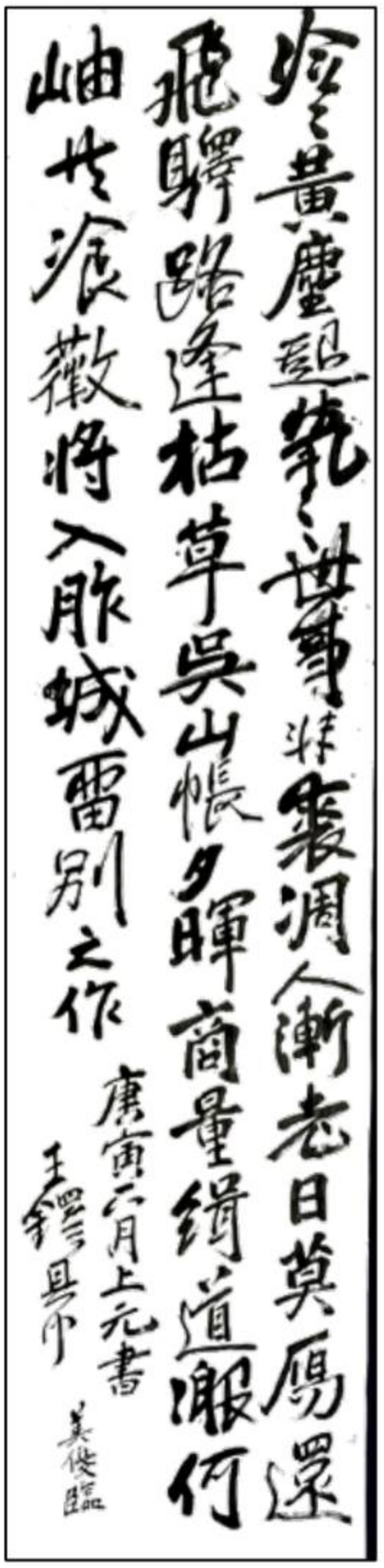


「一茲悲阻面　百里況班條交譬分張切　渉江悲望遙　風途飛藥散　雲路別魂銷　唯有流天月　相憶寄秋霄」

初めて二八を書いたのが一回生の夏。上手くなったのかはともかく、自分が書きたいものはあの時より少し見えてきた気がします。

2

木下美優（二回生）
臨書　行書　王鐸『將入脽城留別之作』　二八



「冷々黄塵起。茕々世事非。裘凋人漸老。日莫雁還飛。驛路逢枯草。吳山悵夕暉。商量緝道服。何岫飧薇。將入脽城留別之作。庚寅正月上元書。王鐸具艸」

二八も王鐸も初めてですがどちらもずっと挑戦したいと思っていたのでやりがいがありました。

3

近藤毅（四回生）

創作　調和体　『龍門の滝』　240×70cm



「大瀑布踊る蛇姫子の前に」

帰省したとき地元の滝によく散歩に行くんですが、夏に帰省した時、親子が遊んでいていいな～と思ったのをそのまま作品にしてみました。

蛇姫伝説という伝承があってそれを元ネタに詩にしています。

4

城本昌明（二回生）

臨書　隷書　『礼器碑』

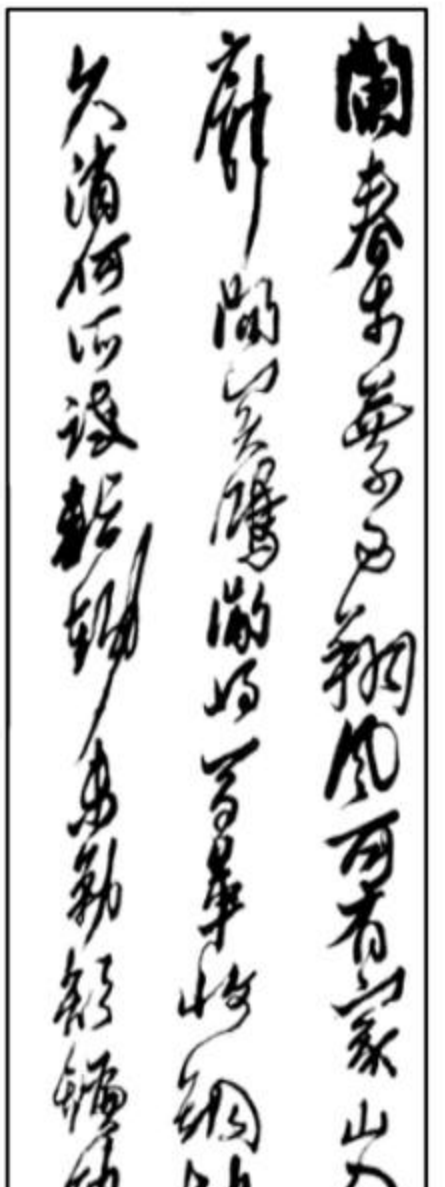


「制不空作、承天之語。乾元以来、三九之載、八皇三代、至孔乃備。聖人不世、期五百、三陽吐図、二陰出識、制作之義、以俟知奥」

大きな隷書作品を書くのはやっぱり楽しいですね。

5

須田光太郎（二回生）
臨書　草書　黄道周『石城寺諸友過集』　二八



「闌春木葉已翔風、可有家山入夢中。過此裘徊成恠鳥、何期寥廓問冥鴻。間將馬革收銅皷、賣得漁錢贖老翁。髀肉久（久）消何所試、耘鋤未勒短鎌功。石城寺諸友過集。録似屈静根給諫。正之。」

黄道周の構成と字の線、落款の書きぶりがすごい好きです。いろんなものの元祖感があります（私見）。

6

戸髙海（三回生）
創作　草書　『蘇軾詩』　二八



「大江東去、浪淘盡、千古風流人物。故壘西邊、人道是、三國周郎赤壁。亂石穿空、驚濤拍岸、卷起千堆雪。江山如畫、一時多少豪傑。遙想公瑾當年、小喬初嫁了、雄姿英發。羽扇綸巾、談笑間、檣櫓灰飛煙滅。故國神遊、多情應笑我、早生華髪。人間如夢、一樽還酹江月。」

黄庭堅や祝允明が持つ独特の横物草書の雰囲気を、縦作品で表現しようという試みです！

7

豊留まり（四回生）
臨書　行書　陶淵明『酬劉柴桑』　二八

「窮居寡人用時忘四運周櫚庭…」
最後に二八に挑戦してみたのですが思ったよりも忙しく、一か月後の自分がちゃんとした作品を出せているかが気がかりです。
楽しい書道部生活を送れたことに感謝です！



8

中野葵（一回生）
臨書　行書　黄庭堅『松風閣詩巻』　二八

「松風閣　依山築閣見平川　夜闌箕斗插屋椽　我來名之意適然　老松魁梧數百年　斧斤所赦今參天風鳴媧皇五十弦」
すごく好きな字！と一目惚れして、書くことを決めました。

NO IMAGE

9

乗杉玲壽（三回生）
創作　調和体　『OOPARTS』　二八

「せいねん（青年）はビル街で風をきる」
羊文学の歌『OOPARTS』から引用しました。若者の歌です。



10

松阪明日香（一回生）
創作　隷書　『王維詩　竹里館』　二八

「獨坐幽篁裏　弾琴復長嘯　深林人不知　明月来相照」
初めての創作作品です。隷書の良さが伝わるよう努力しました。



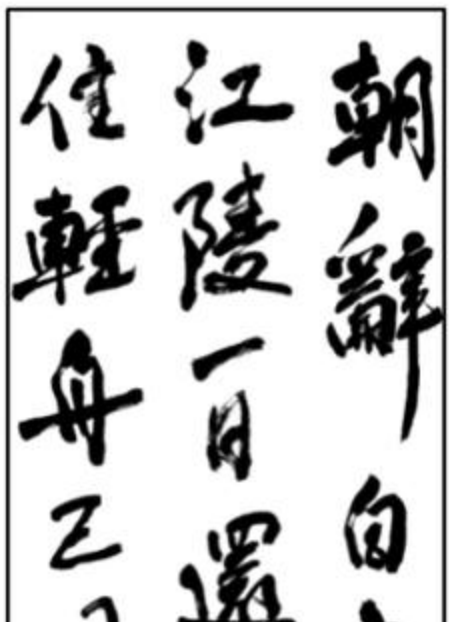
11

渡部裕貴（修士一回生）

創作　行書　『早発白帝城』　二六

「朝辞白帝彩雲間　千里江陵一日還　両岸猿声啼不住　軽舟已過萬重山」

白帝城は長江三峡ダムの水位上昇によって一五年ほど前に孤島になってしまったらしいです。ちなみに、京都大学大学院工学研究科（一部専攻除く）も一五年ほど前に陸の孤島・桂キャンパスに移転しました。



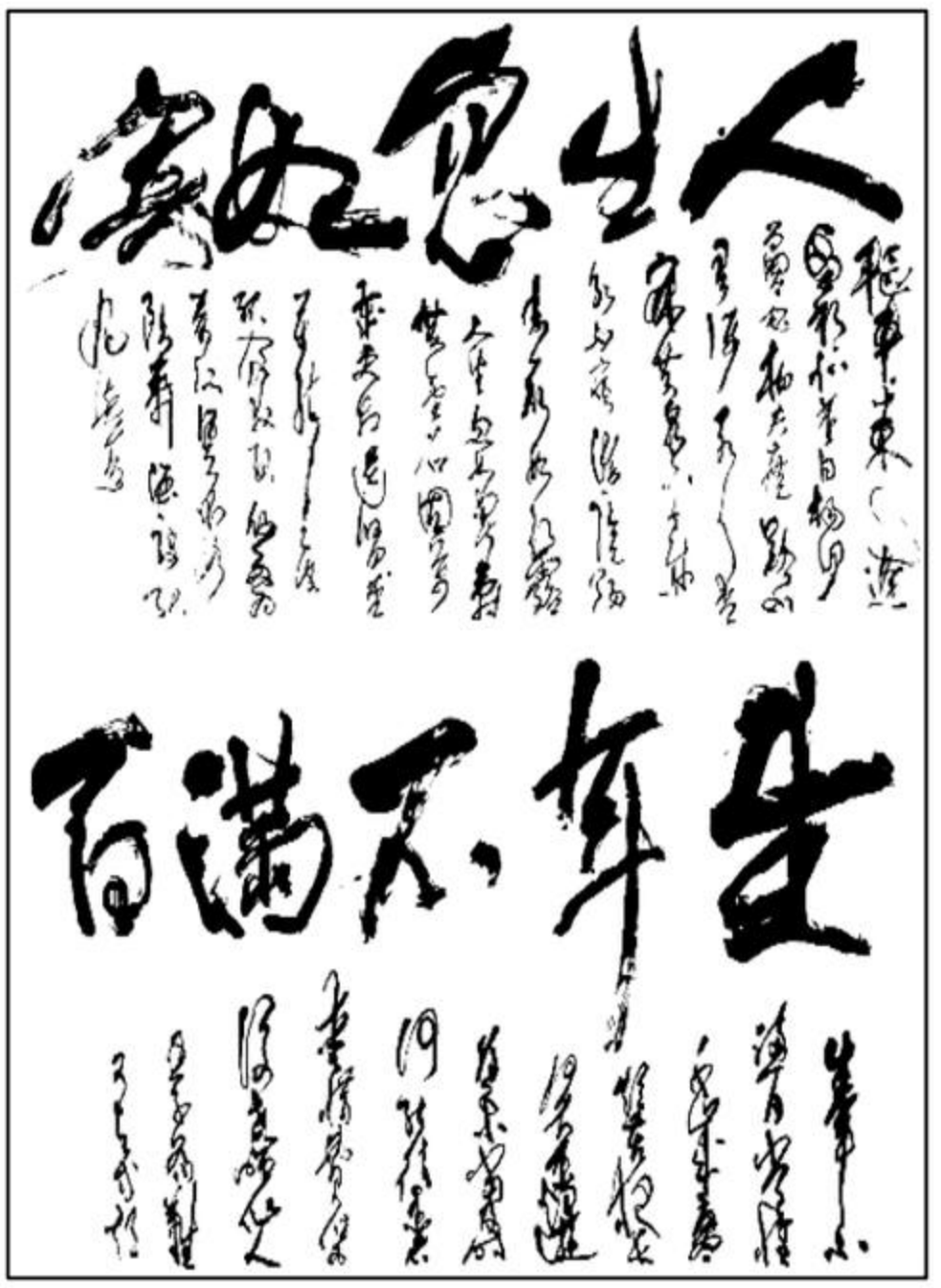
12

乗杉玲壽（三回生）・戸高海（三回生）

創作　行草　『古詩十九首より』　全紙横二枚

「人生忽如寄　生年不滿百」

二人の大字と細字を組み合わせて作品を制作しました。合作なのに表装代が安くなってないのはなんでだろう。



13

植村亮（一回生）
創作　行草　『下学而上達』　半切

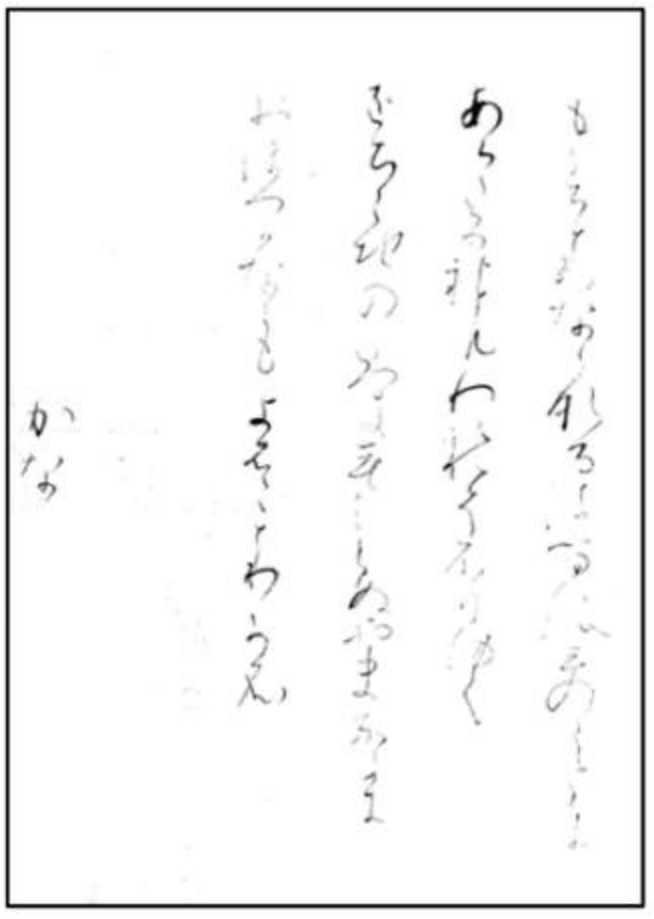
「下学而上達」
高三のときに書いた拙作です。



14

大原佳奈（一回生）
臨書　行書　伝紀貫之『高野切第一種』　半紙

「ももちどりなくなるはるはものごとにあらたまれどもわれぞふりゆく　をちこちのたづきもしらぬやまなかにおぼつかなくもよぶこどりかな」
お手柔らかにお願いします。



15

大林明日香（二回生）
創作　草書　『秋風』　半切

「何處秋風至蕭蕭送雁群　朝來入庭樹孤客最先聞」
寒いです。



16

釜田 弘一朗（四回生）
臨書　隷書　『乙瑛碑』　半切

「故特立廟褒成侯四時来祠事已即去」
乙瑛碑が苦手だったのでチャレンジしてみました。



17

木村隼翔（二回生）

臨書　楷書　『始平公造像記』

「始平公像一区」

オススメされて書いてみました。まだまだ改善の余地があるので再挑戦したいです。



18

倉橋あい（三回生）

創作　行書　『福寿』　半切

「福寿生無量」

人生が福寿に溢れたものになるようにと願いを込めて書きました。

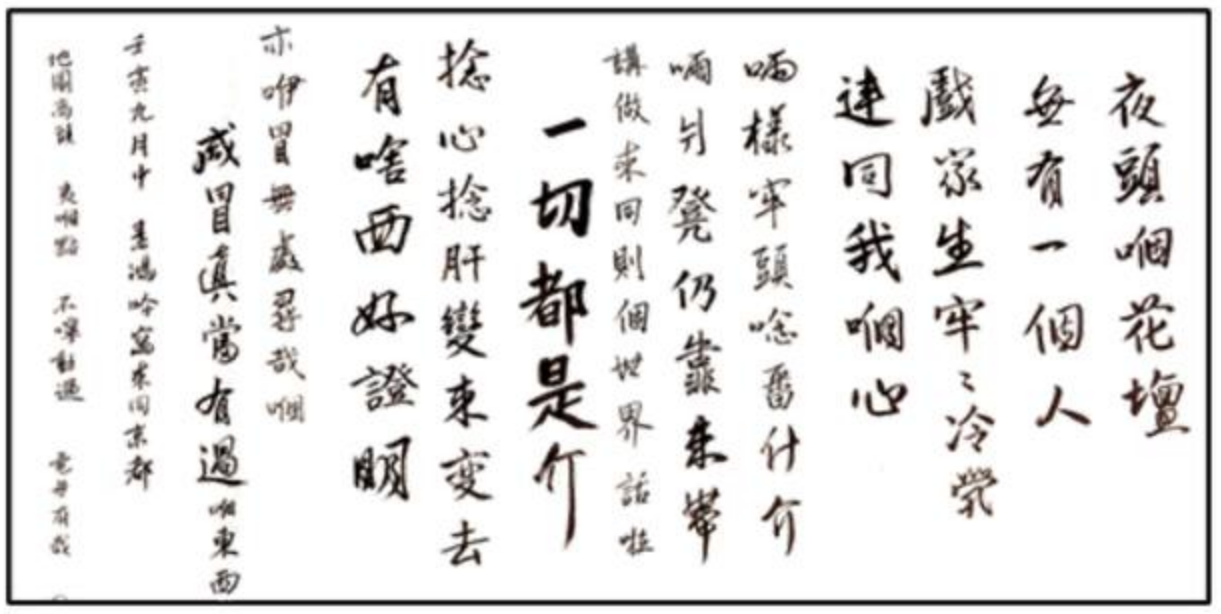


19

凌榆凱（三回生）

創作　行書　『坐夯失戀嗰花壇裡（失恋の公園に座って）』　全紙

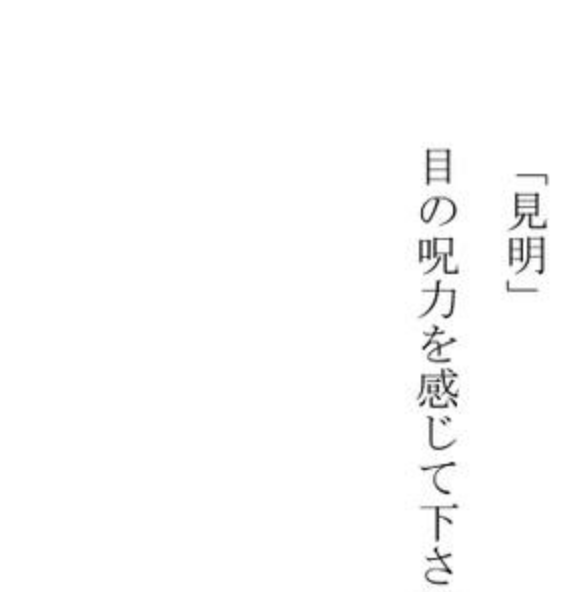
「夜頭嗰花壇　無有一個人　戲哥生牢冷𠱸　連同我嗰心　戲哥生唸番什介　啲爿　凳仍靠來帶　耶講作來同則個世界話　一直都是介　捻心捻肝變來變去　有啥西好證明　亦咿冒無處尋哉嗰　咸冒真當有過嗰東西」



20

近藤毅（四回生）
創作　篆書　『見明かす』　全紙　1/2

「見明」
目の呪力を感じて下さい。



21

齋藤亜紀（一回生）
臨書　草書　王鐸『張芝帖』　半切

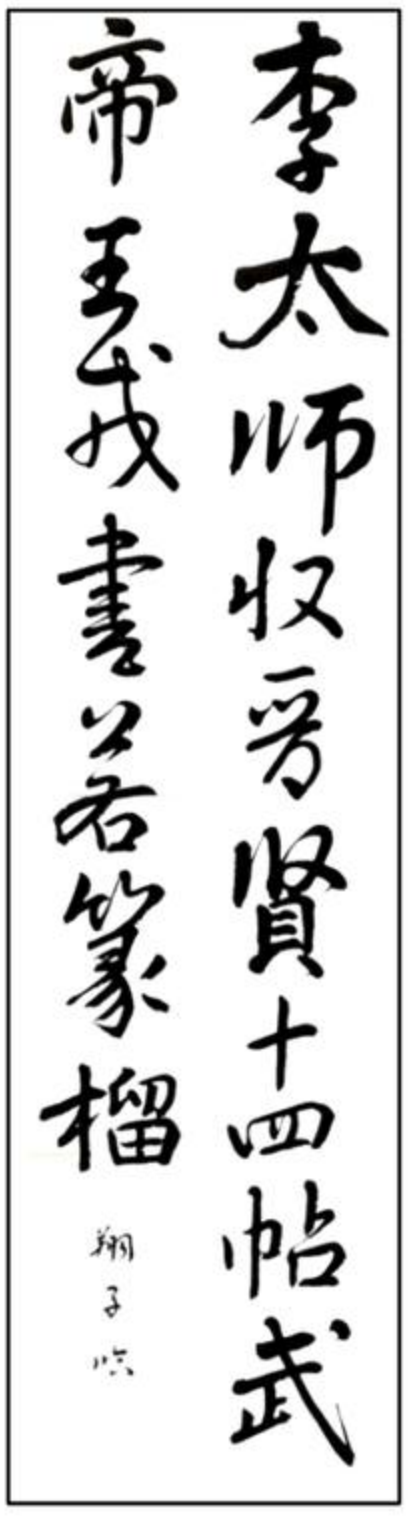
「不辨行動潜不可耳終年此當治何理邪有諸分張復」
初めて草書を書いてみました。難しいですね…。



22

鈴木翔子（四回生）
臨書　行書　米芾『李太師帖』　半切

「李太師收晉賢十四帖武帝王戎書若篆榴」
最後の夏合宿で書いた作品です。



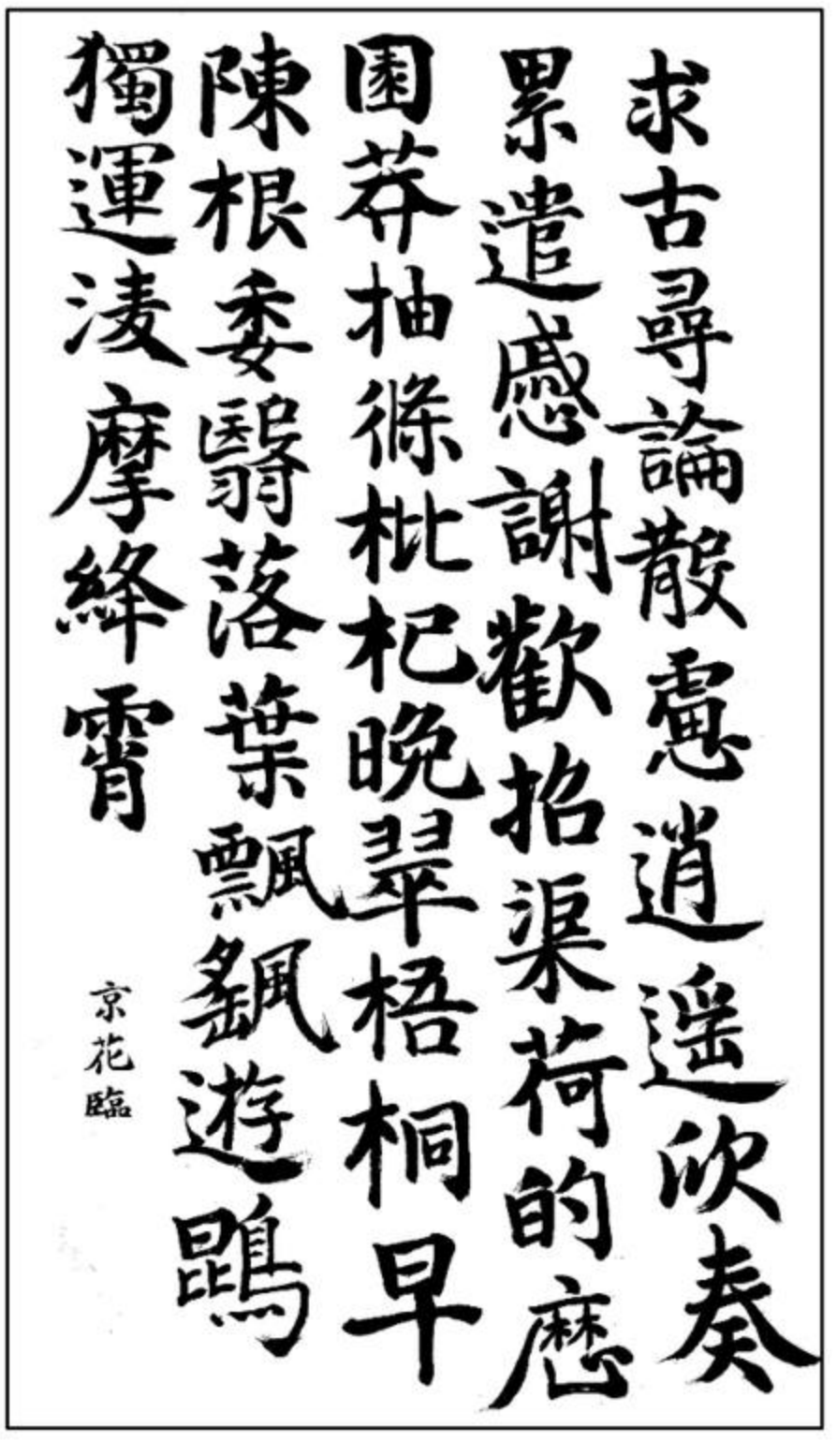
23

関美乃（四回生）
臨書　草書　王献之『中秋帖』　半切

「中秋不復不得相還為即甚省如何」
二年間くらい書こう書こうと思いながら先延ばしにしていた作品です。二年前は難しすぎて挫折しましたが、今回も挫折しかけました（その結果サイズが全紙から半切になりました）。



24　高石京花（三回生）
臨書　楷書　智永『真草千字文』　全紙



「求古尋論。散慮逍遙。欣奏累遣。慼謝歡招。渠荷的歷。園莽抽條。枇杷晩翠。梧桐早彫。陳根委翳。落葉飄颻。遊鵾獨運。凌摩絳霄。」

『真草千字文』の楷書部分のみを臨書してみました。楷書は原点回帰です。全紙って難しいですね…。

25　永田はるな（一回生）
臨書　楷書　褚遂良『雁塔聖教序』　半切

「能無疑惑者哉。然則大教之興。基乎西土。」

雁塔聖教序を臨書しました。この法帖は高校生の時にも書いたことがありますが、今回は、品評会にて様々な方から沢山のアドバイスを頂き、作品を作ることができました。細いながらも芯のある、美しい線を書くことを目標にしています。

26　中林亮（修士二回生）
創作　楷書　『朱熹「偶成」』　半切二連



「少年易老学難成　一寸光陰不可軽」

研究している身としては刺さる内容になっています。

27

二宮海椰（二回生）
臨書　草書　張瑞図『感遼事作六首巻』　半切

「君怨孤城獨壓陣雲気戦士帰夜月魂聞説汾河衣」
張瑞図を臨書しました。



28

乗杉玲壽（三回生）
創作　調和体　『虎卯図』　40×50cm

「ゆく年くる年」
年末なので干支にかけて作りました。



29

乗杉玲壽（三回生）
創作　草書　『倣傅山狂草軸』　半切

「晋公千古一快逢吉敬信朱晦翁獨論祧廟事不肯傳含可謂善争道學者矣■路」
すごい自信作。



30

松尾有輝也（修士二回生）
創作　行草　『陸游詩一節』　半切

「有酒便應遺世事得閑随處勝官身」
米芾の字を参考に作品を書き始めましたが、最終的には自分の書きたいように書きました。



31

松岡加純（一回生）

臨書　篆書　『石鼓文』　半切

「流■滂々盈■濟君子卽涉々馬汧殹泊々■舫舟西逮自■徒■隹舟■」

綺麗な曲線を目指しました。



32

松岡柚花（四回生）

臨書　仮名　西行『山家心中集』　軸

「いまさらにはるをわするゝはなもあらじおもひのどめてけふもくらさむ…」

パキパキとしたキレのある線を目指しました。初めての「伝 西行」です。



33

松阪明日香（一回生）

臨書　楷書　顔真卿『顔勤礼碑』　半切

「北齋給事黄門侍郎。隋東宮學士。」

ずっと書きたかった顔勤礼碑。立派でふくよかな字を目指しました。



34

宮原康輔（一回生）

臨書　行書　王義之『東比帖』　半切

「東比問。爲慰。卽以也。謝諸子。往欲如何。」

王羲之の東比帖を書きました。ただ臨書するだけでなく、半切で書くに当たって自然な形になるように線の太さや字の間隔などを工夫しました。



35

木村隼翔（二回生）・須田光太郎（二回生）
創作　行書　『年末に』　半切二連

「一年將盡夜、萬里未歸人」
初めての二回生同士の合作です。年末の寂しさをかもし出しつつ、一体感が出ていればいいなと思います。



36

一回生合作
創作　破体書　『白居易詩』　聯落

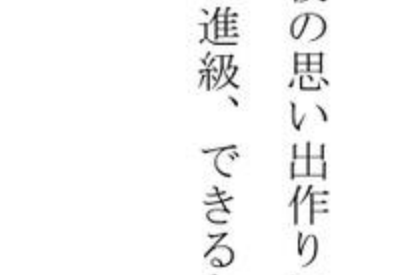
「已訝衾枕冷　復見窗戸明　夜深知雪重　時聞折竹聲」
一回生八人で破体書に挑戦しました。それぞれの個性が出て、とても楽しい合作でした！



37

四回生合作
創作　漢字かな交じり主体　『卒業証書』　横3ｍ×縦1.5ｍ

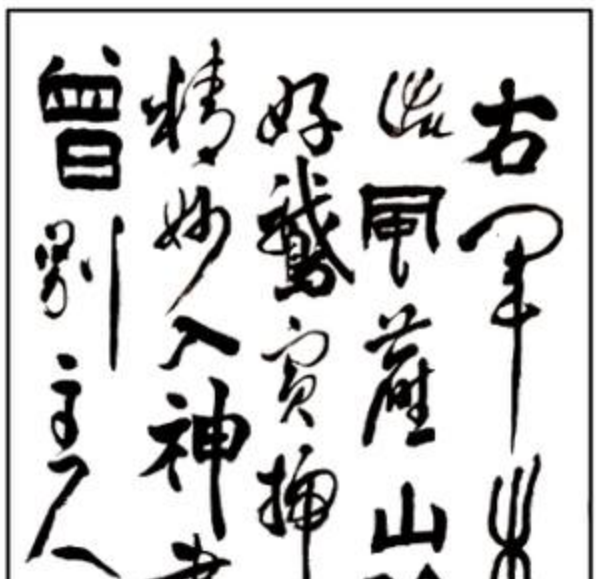
進学・就職を控え、最後の思い出作りに自分たちの卒業を自分たちで証しました。卒業・進級、できるといいですね……（恐怖）



38

中村勇真（博士一回生）・市川拓真（修士二回生）・鵜川大輝（修士二回生）・中林亮（修士二回生）・安田直記（修士二回生）・吉田凌（修士二回生）・岩田恵理子（修士二回生）・柴田達也（修士一回生）・服部佳乃子（修士一回生）・渡部裕貴（修士一回生）・石本森羅（六回生）
臨書　破体　辻本史邑『破体五律』　全紙

「右軍本清真、瀟灑出風塵。山陰過羽客，愛此好鵝賓。掃素寫道經，筆精妙入神。書罷籠鵝去，何曾別主人。」
院生世代でワイワイ合作しました。

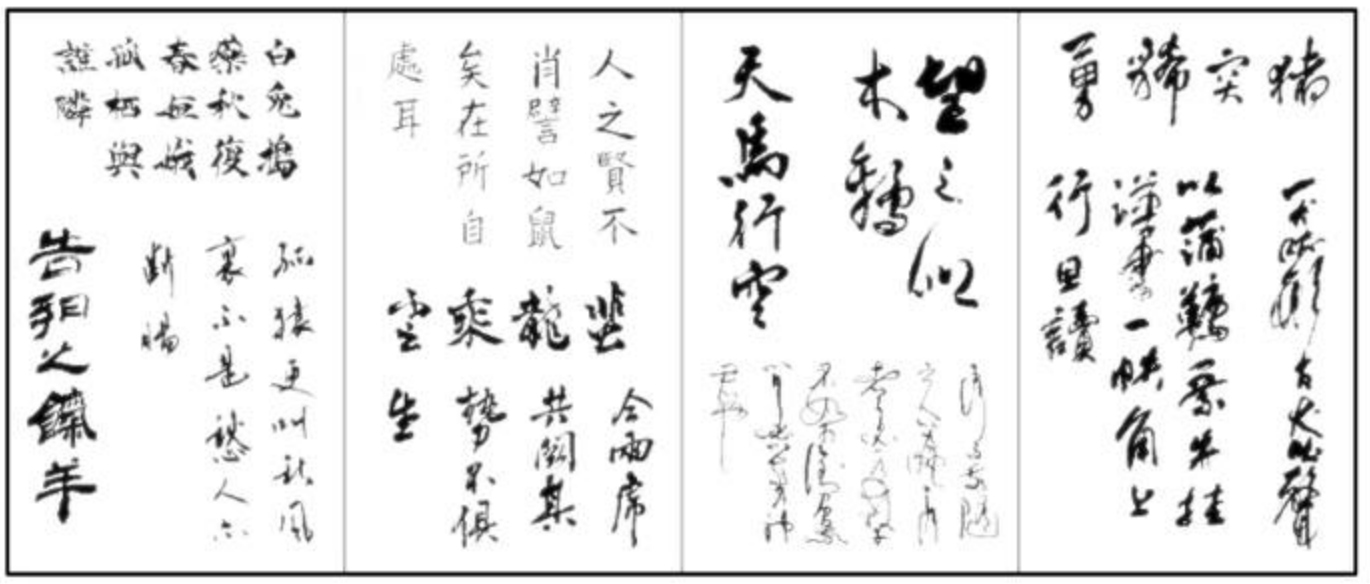


39

中村勇真（博士一回生）・石本森羅（六回生）・秋友祥香（修士一回生）・乾未樹（四回生）・戸高海（三回生）・須田光太郎（二回生）

創作　混合体　『歴代部長合作　～干支～』　四曲屏風

六代に渡る部長達が集結することで生まれた、奇跡の一枚です。



○禅居庵

40

市川拓真（修士二回生）

創作　隷書　『春和景明』　半切1/3

「春和景明」

楊峴の隷書を元にして創作作品を制作しました。るような作品になっていたら嬉しいです。



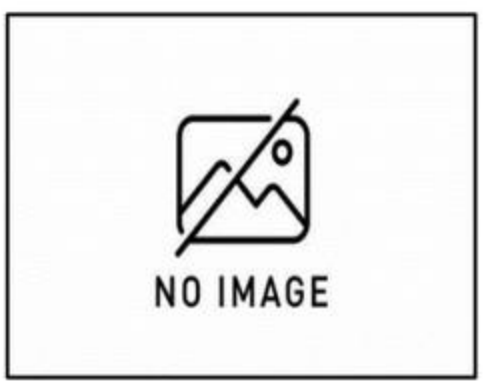
41

乾未樹（四回生）

創作　行書　伝橘逸勢『伊都内親王願文』　半切1/2

「先考先妣資天人之勝気稟江漢之英霊器…」

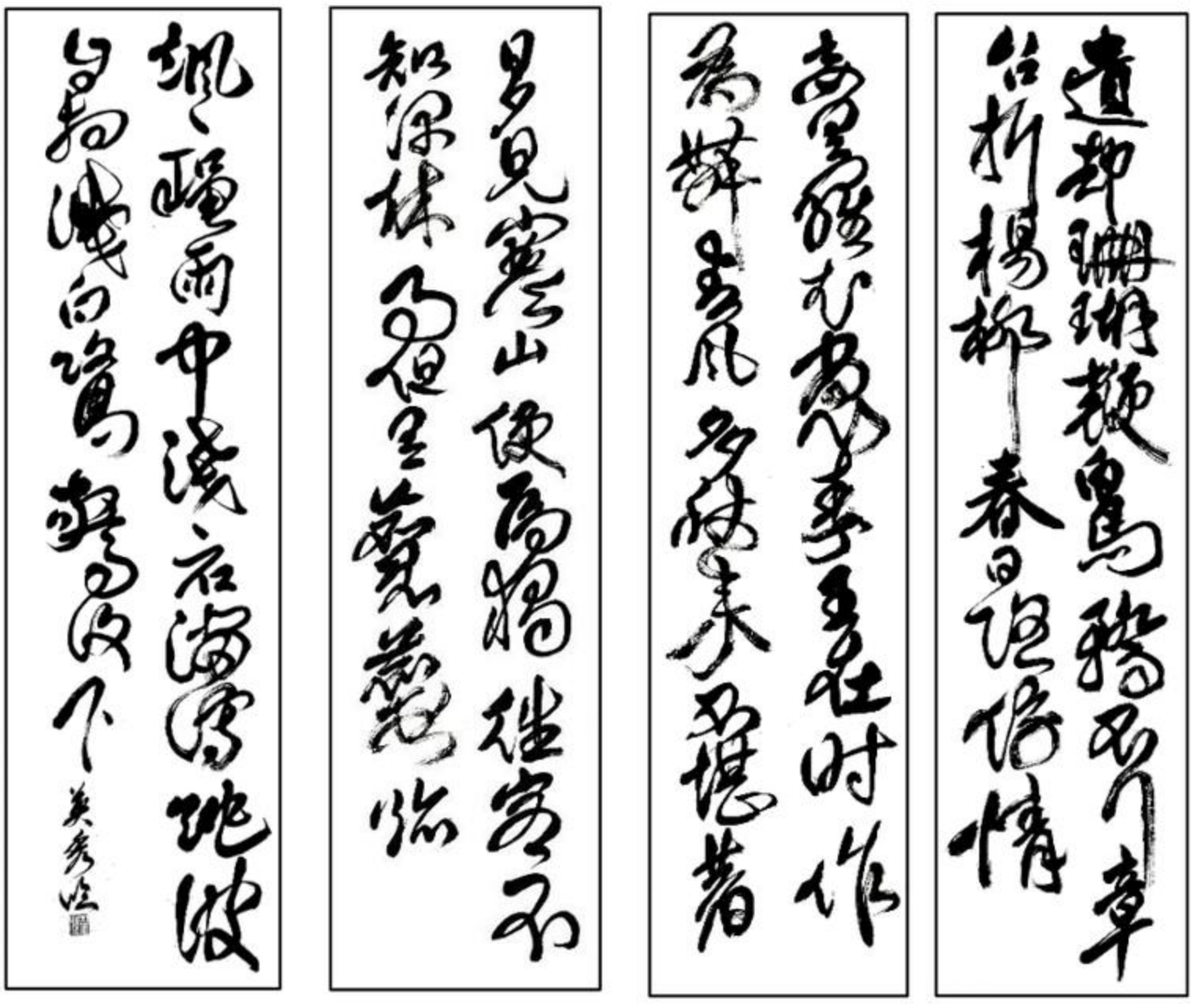
三筆最後の一人を遂に臨書しました。元の古典は全ての字が魅力的なので、また全臨で再チャレンジしたいです。



42

植村亮（一回生）

臨書　行草　傅山『草書五言絶句四首四屏』　半切四連



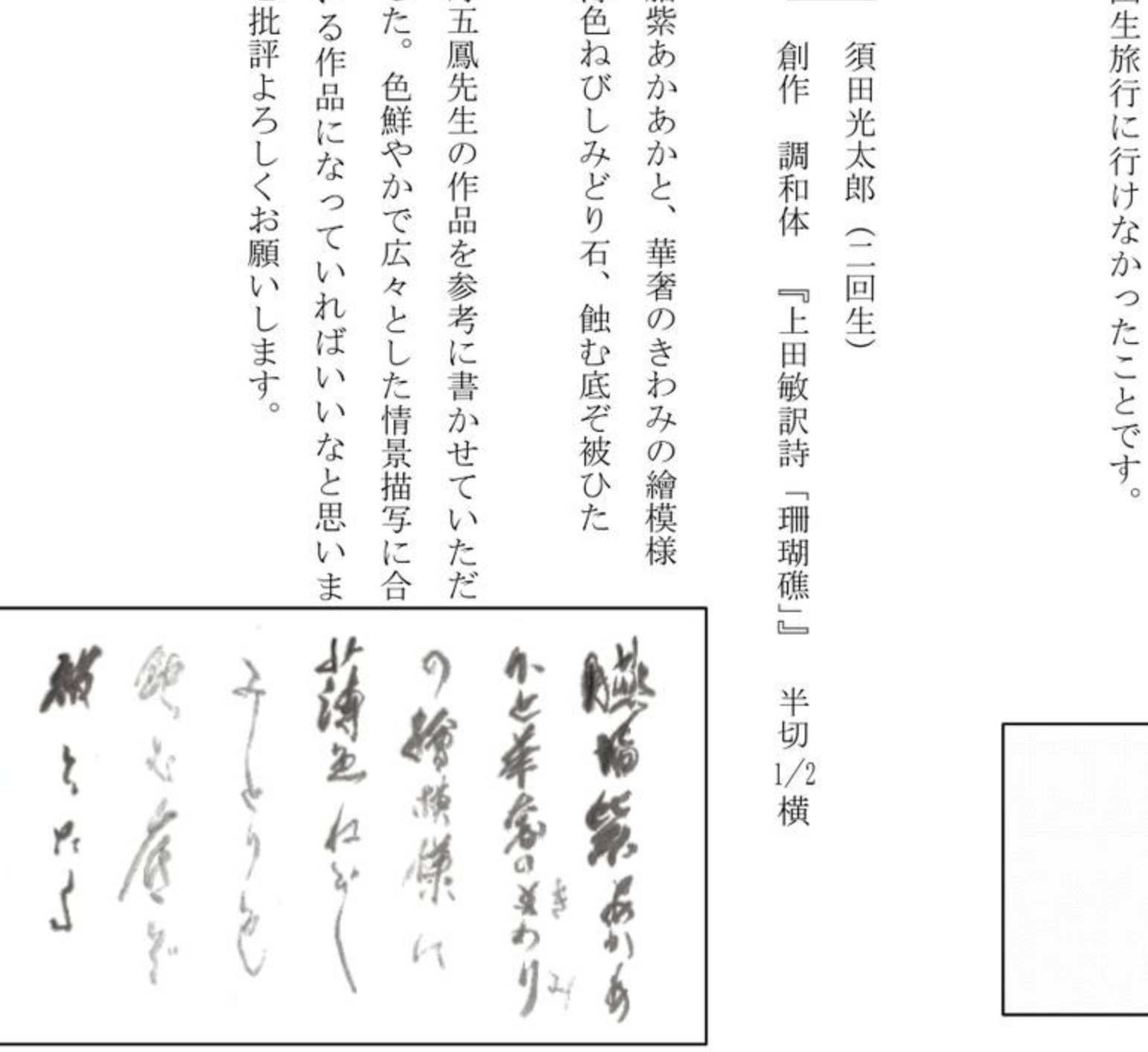
「遺却珊瑚鞭白鳥…」

迷走の末

43

栗原瑞樹（四回生）

臨書　隷書　金農『金冬心隷書冊』　巻子



「如白人雖…」

あっという間の四年間でした。心残りは後輩とのご飯と回生旅行に行けなかったことです。

44

須田光太郎（二回生）

創作　調和体　『上田敏訳詩「珊瑚礁」』　半切1/2横

「臙脂紫あかあかと、華奢のきわみの繪模様に、薄色ねびしみどり石、蝕む底ぞ被ひたる。」

日比野五鳳先生の作品を参考に書かせていただきました。色鮮やかで広々とした情景描写に合っている作品になっていればいいなと思います。ご批評よろしくお願いします。

45

戸髙海（三回生）

創作　行書　『書者心画也』　半切

「書者心画也」

「書は心の画なり」という言葉です。この言葉通り、書は心と通じているなあと時々思います。





46　中野葵（一回生）
創作　行書　『暢適』　全紙

「暢適：心をのびのびとさせて楽しむ」良い言葉と出逢えたので、「全紙に悠々と漢字を書きたい！」を叶えました。



47　中林亮（修士二回生）
創作　楷書　『玉雪開花』　色紙

「玉雪開花」
辛い時でも努力していればいつか花開く的な意味もあるらしいです。



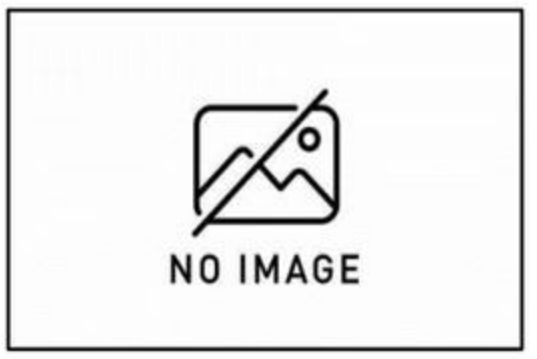
48　中村勇真（博士一回生）
臨書　行書　王義之『蘭亭序』　半切

「永和九年歳在癸丑暮春之初會于會稽山陰之蘭亭脩禊」
今年で書道を始めて七年になりますが、初めて蘭亭序を臨書してみました。
やはり基本は難しいですね。

49

中村勇真（博士一回生）
創作　楷書　『欧楷―蘭亭序―』　聯落ち

「永和九年歳在癸丑暮春之初會于會稽山陰之蘭亭脩禊…」
欧陽詢の楷書の魅力が伝わればいいなと思います。



50

乗杉玲壽（三回生）
臨書　行書　王義之『蘭亭序』

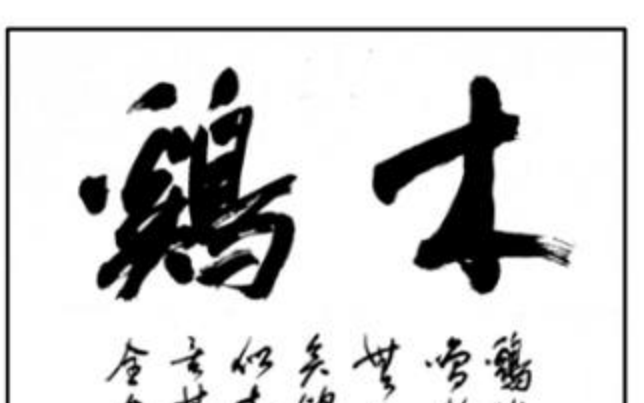
「永和九年歳在癸丑暮春之初會于會稽山陰之蘭亭」
がんばりました。



51

松尾有輝也（修士二回生）
創作　行書　『木鶏』　半切横1/3

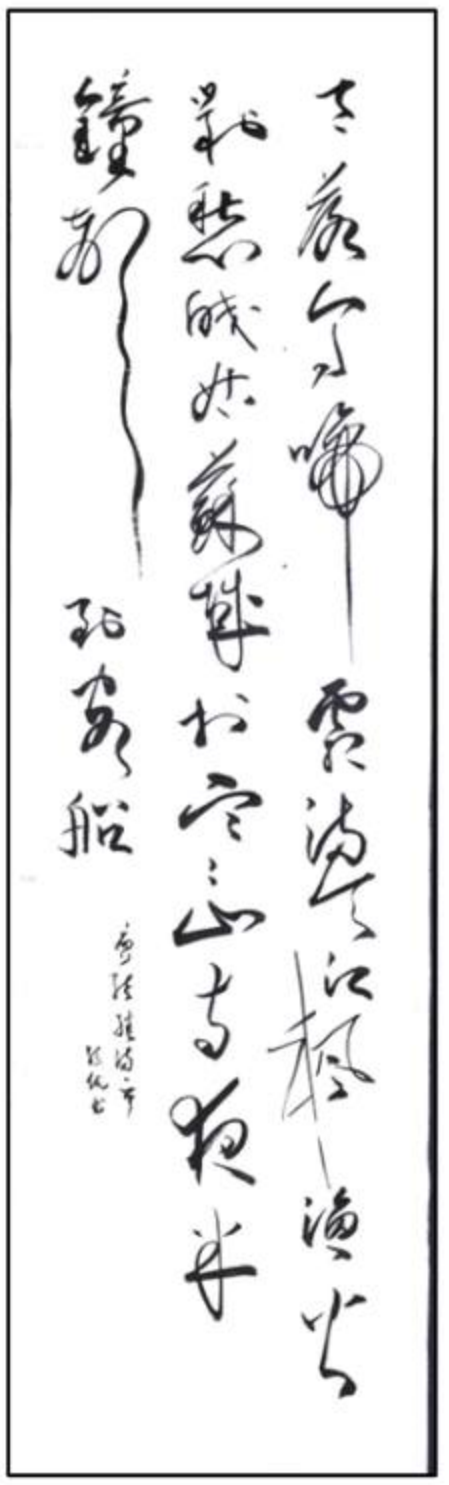
「木鶏」
画数が異なる行書二文字のバランスを揃えることが難しかったです。



52

結依（一回生）
臨書　行書　張継『楓橋夜泊』　半切

「月落烏啼霜満天　江楓漁火對愁眠　姑蘇城外寒山寺　夜半鐘声到客船」
あえて筆画が少なくて書きやすそうな草書作品を選んでたけど意外と難しかったです。またリベンジしたいです！！



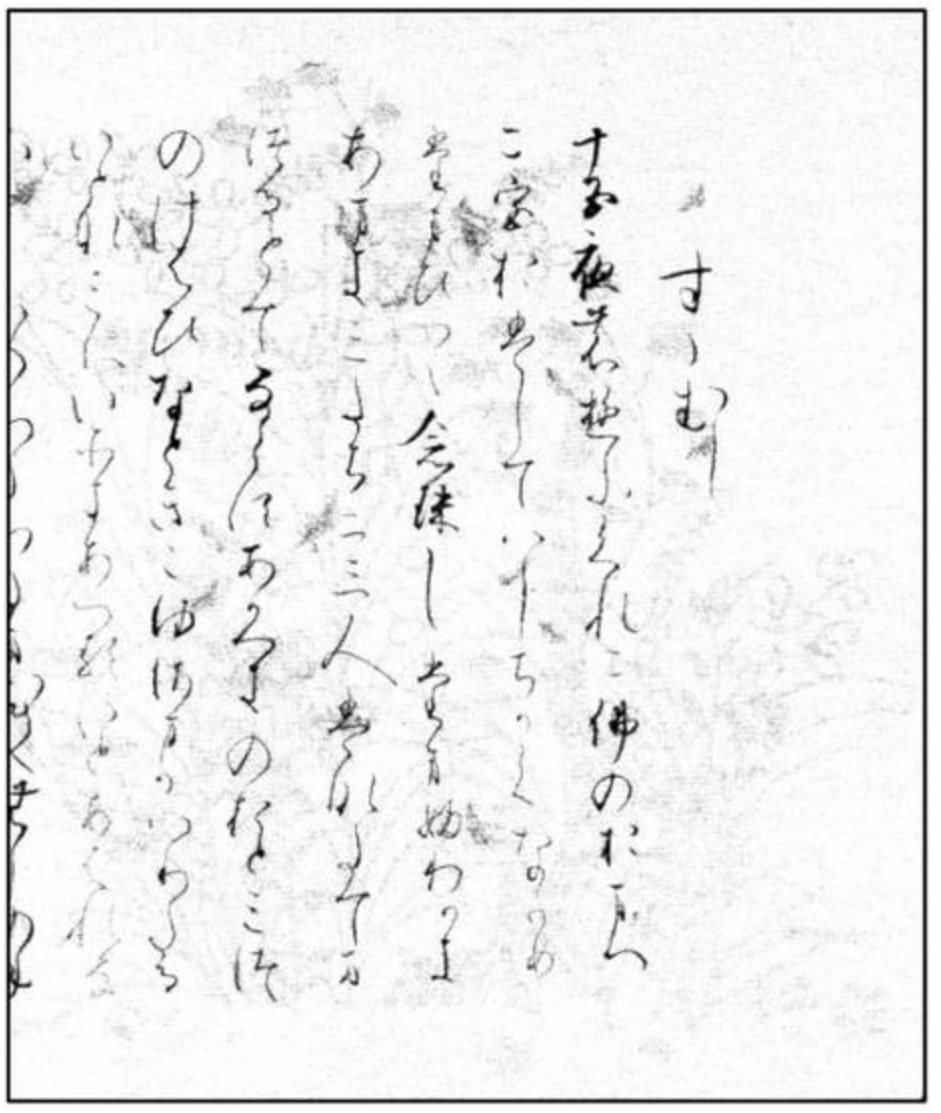
53

松岡柚花（四回生）

臨書　仮名　『源氏物語絵巻』　巻子

「…すゞむし　十五夜のゆふぐれに、仏のおまへに宮おはして、はしちかくなでしこのいとおもしろきをながめたまひつゝ、念珠したまふ。…」

筆者が定かではありませんが、四種の書風で書かれています。帖による書風の違いを楽しんでいただけると幸いです。



54

松岡柚花（四回生）

臨書　六体　趙孟頫『六体千字文』　全紙

「天地玄黄、宇宙洪荒。日月盈昃、辰宿列張。…」

憧れだったので書きました。全くの見様見真似ですが、楽しく書けました。



55

安田直記（修士二回生）

創作　行書　『蕭散風神真隠人』　半切二分の一

「蕭散風神真隠人」

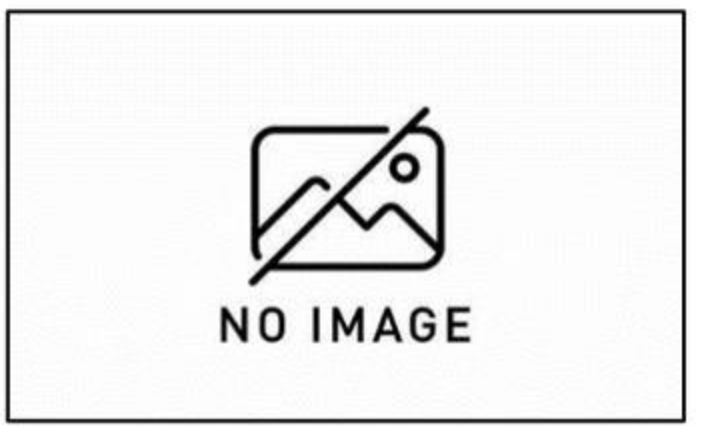
趣味は書道ですと言える社会人になりたいです。



56

吉田凌祐（修士二回生）
創作　仮名　『伏見はくれたけ』　色紙

「夢通ふ　道さへ絶えぬ　呉竹の　伏見の里の　雪の下折れ」
夢は一人前の物理学者。日々利用した鉄路。
その経由地に伏見の中心部がある。近年では
雪はうっすらと積もる程度だ。我が夢路にも
交通にも障害となることはない。



57

戸髙海（三回生）・乗杉玲壽（三回生）・石田あかり（三回生）・倉橋あい（三回生）
創作　行書　『寒いですね』　全紙

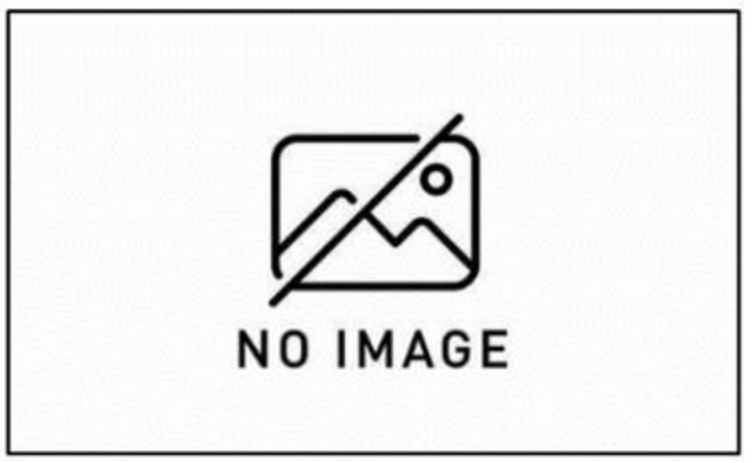
「三寒四寒」
冬ですねぇ～。



58

乗杉玲壽（三回生）・戸髙海（三回生）・須田光太郎（二回生）・植村亮（一回生）
創作　篆刻　行草『山月記』　半紙

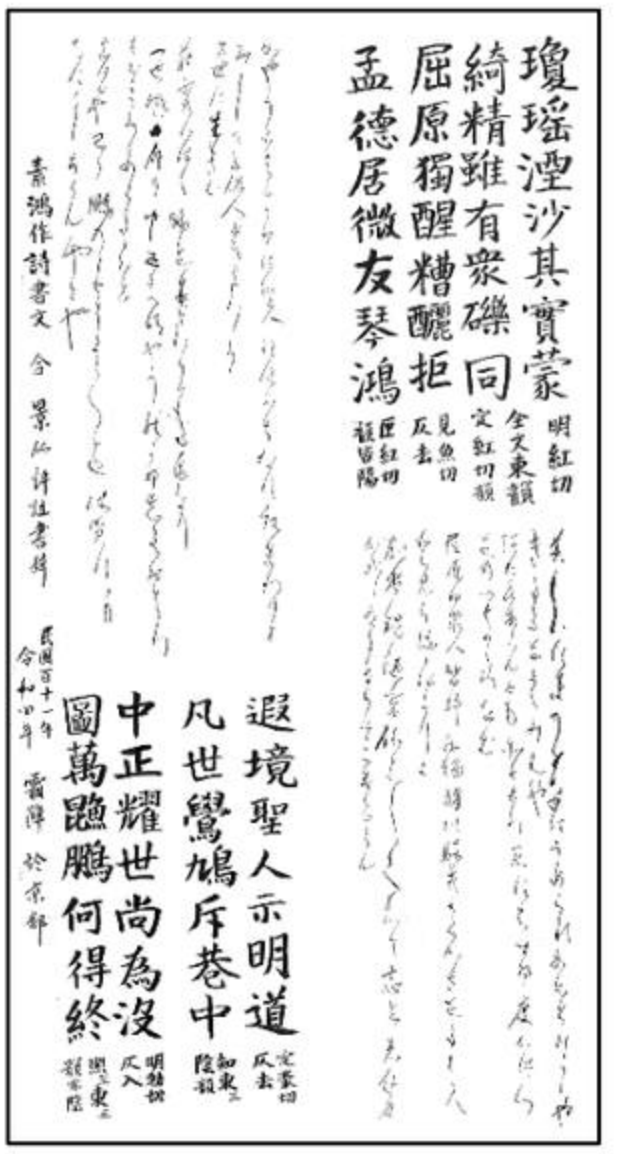
「此夕溪山対明月　不成長嘯但成嗥」
山月記で詠まれる漢詩の中で印象的な二連を題材に
四人で合作しました。二人が篆刻し、後の二人が文
章を書いています。各人の思う山月記のイメージを
込めて紙面を纏めることを目指しました。



59

凌楡凱（三回生）・須田光太郎（二回生）

創作　楷書・仮名　『「懐才不遇詩」吟書並評釋』　全紙



砂の中に埋まる玉に自らをなぞらえ、また屈原や、劉禹錫、蒋介石といった傑人の高潔な志と懐才不遇の結末を偲び、自らの苦悶を重ねて詠んだ漢詩に和文評注を加えています。あたかも古典世界の漢人と日本人との対話を目の当たりにしているような体験を鑑賞者に喚起させられたなら、幸いです。

60

市川拓真（修士二回生）・鵜川大輝（修士二回生）

創作　調和体　『100万年の幸せ!!』　全紙1/2



「夢のかけらを集めて旅に出ようか　果てなき道　虹の彼方へ歩いて行こう」春から社会人になりますが、この詞のとおり夢を胸に抱きながらこれから始まる未来を歩んでいきたいと思います。

61

全体合作

臨書　『えんぴつ臨書』

本気ながらもお手軽に、臨書作品を作成しよう！という思いのもと、発案された全体合作です。何気なく机に向かっていた時に、ふとノートに書きつけた想い出の一節を、作品に昇華することができた人もいるのではないでしょうか。部員それぞれの個性が現れた作品を、どうぞご堪能下さい。

【顧問・部員紹介】

顧問：京都大学大学院文学研究科准教授　成田健太郎

京都大学附属図書館　図書館企画掛主任　行友三輪子

技術顧問：日展会友　書家　大原蒼龍

一回生

総人　植村亮

工　大原佳奈

理　小田島浩之

薬　GONG　ZIQING

理　兒玉泰明

総人　齋藤亜紀

文　永田はるな

理　中野葵

総人　松岡加純

農　松阪明日香

工　宮原康輔

医　山田健太

文　リーイーウェイ

二回生

薬　淺雛穂乃花

経済　浅山桃佳

農　大林明日香

医　木下美優

文　木村隼翔

医　小谷大翼

文　坂田侑美奈

文　城本昌明

文　須田光太郎

農　鶴岡直穂

法　中西結希乃

総人　二宮海椰

文　南出祐希

医　森田歩

工　山下理子

薬　由里本陽香

理　渡辺紗英

三回生

教育　飯田望未

法　石田あかり

京女　大西沙穂

兵医　岡雅博

理　倉橋あい

理　凌榆凱

文　髙石京花

農　戸髙海

理　乘杉玲壽

四回生

農　乾未樹

文　大橋明日香

医　片岡美緒

医　釜田弘一朗

法　栗原瑞樹

医　近藤毅

京女　鈴木翔子

法　関美乃

文　豊留まり

文　白植寛

農　松岡柚花

六回生

文　石本森羅

修士一回生

理　秋友祥香

総人　伊藤迅亮

農　岩田恵理子

工　坂崎亜実

農　柴田達哉

農　服部佳乃子

工　渡部裕貴

修士二回生

工　市川拓真

工　鵜川大輝

情報　中林亮

工　松尾有輝也

工　安田直記

理　吉田凌祐

修士四回生

経済　沙錦平

博士一回生

理　中村勇真

工　金祺民

博士二回生

理　原誠人

京都・書道用具店

松楳園

一般用の書道道具からプロ専用の用具まで幅広く取り扱いしております。小売もしておりますので、お気軽にお越し下さい。

取扱商品

書道用具全般
毛筆・松楳園製
毛筆・中国製
墨・墨液 各種
紙・漢字・かな用
硯・下敷・印材
他・書道小物
水墨画用具

京都市下京区柳馬場通仏光寺下る万里小路町164
TEL 075-351-6380　FAX 075-361-8006
http://www.shoubaien.co.jp　定休日(日・祝日)

掛軸 文房四宝 和紙の店 書楽

TEL:075-762-2330
〒612-8436
京都市伏見区深草新門丈町 172

京都二条 銘筆・名硯・古墨・文房四寶の店

香雪軒

〒604-0912 京都市中京区二条通河原町東入ル
桶之口町474番地
営業時間 10:00-19:00 (不定休)
Tel 075-231-1695
Mobile 090-3495-4060

文房四寶(筆・墨・硯・紙)和紙工芸品 書画作品

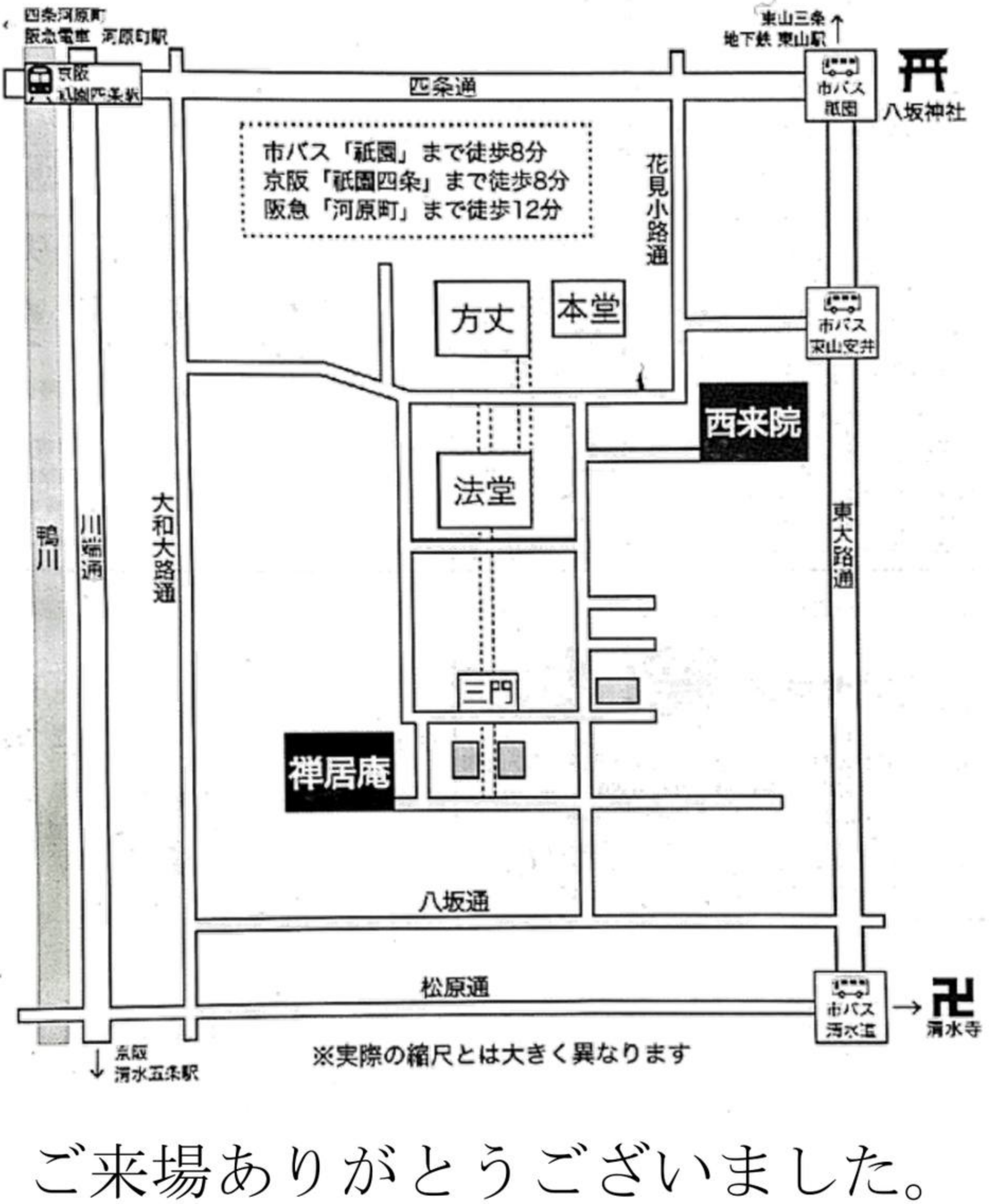
書芸サロン 贊交

株式会社 贊交社
〒605-0992
京都市東山区鞘町通七条上ル下堀詰町 242
TEL/075-541-1112 FAX/075-541-1113
E-mail/info@shoga-sankou.co.jp

京都市中京区の表具展
青緑堂山中表具店

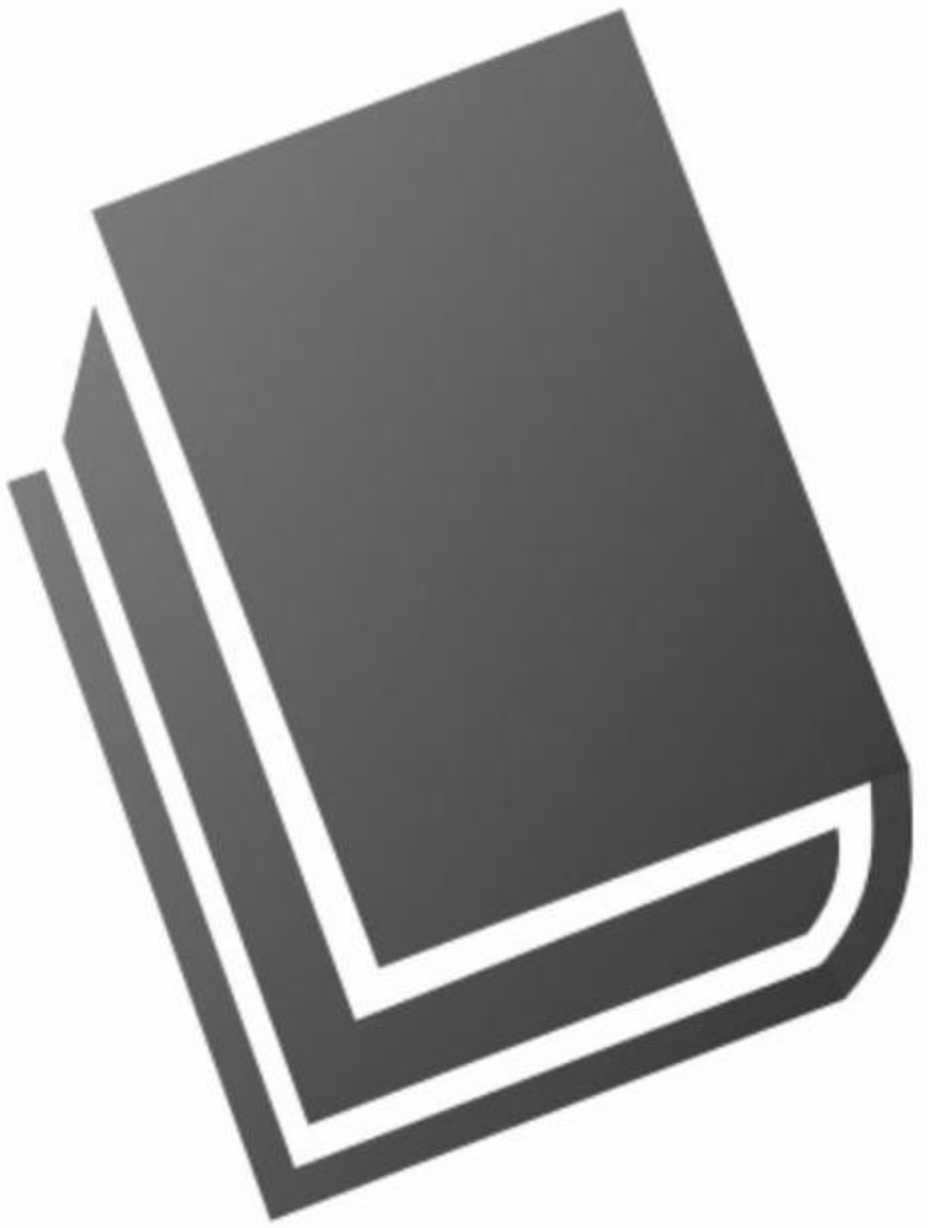
〒604-8102
京都市中京区姉小路富小路西入ル菊屋町 567
TEL：075-221-3381　FAX：075-252-1967
http://yamanaka-hyouguten.com

—建仁寺案内図・周辺地図—



ご来場ありがとうございました。

京都大学書道部



This book was
made by the LeME